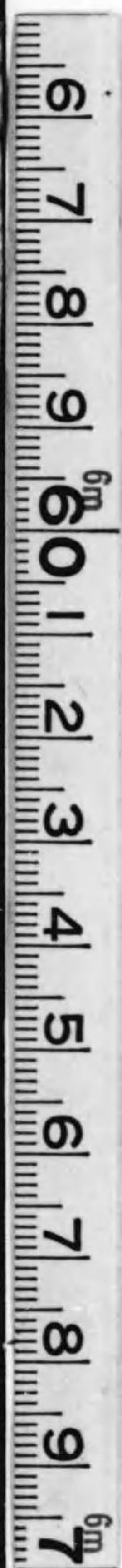


特 232

101

佛祖諷經の仕方

始



特232
101



茂木無文著



目次

第一章 總序	三
一 佛祖の意義	三
1 三世の諸佛	三
2 禮佛の態度	四
3 本尊様	五
二 我宗の本尊觀	六
第二章 佛祖諷經の實際	九
一 三佛會	九
二 達祖忌と兩祖忌	一〇
第三章 三佛會詳解	一三
一 諷經と讀經	一三
二 三佛會に讀む經咒	一三

三	佛誕生會	灌佛會	一五
四	佛前の供具、七文錢		一六
五	灌佛會式典と回向		一八
六	灌佛會の宣疏		二〇
七	佛涅槃會		二二
1	涅槃像の事		二五
2	涅槃團子其他の獻供		二七
八	成道會法要		二八
第四章 二祖忌解説			
一	達祖忌		三一
1	達磨様		三一
2	日本渡來の達磨様		三三
二	達祖忌法要、迎眞諷經		三四
三	達磨忌の疏		三六
四	兩祖忌		三九
1	宗祖としての兩祖		三九

2	曹洞の宗名		四〇
3	高祖大師の御行狀		四二
4	大祖大師の御行狀		四四
五 兩祖忌の疏			
1	兩祖同時奉修の疏		四五
2	高祖忌の疏		四七
3	大祖忌の疏		四八
六	疏文の作爲と其の規格		四九
七	疏文の書方		五一
八	疏文書方の實例		五三
九	可漏の事		五五
十	僉疏式		五七
十一	二祖忌回向文		五九
第五章 開山忌其他の法會			
一	各寺の開山忌		六一
二	尊宿世代及亡僧回向		六三

三 亡僧とは何か……………五

第六章 兩祖降誕會……………七

一 その法要……………七

二 兩祖降誕會回向……………六

第七章 佛祖諷經一般心得……………七

第八章 出班焼香……………七

一 緒言……………七

二 出班焼香の員數……………七

三 兩班の稱呼……………七

四 出班焼香の諸準備……………七

五 導師上殿……………七

六 傳供の法式……………八

1 大展湯食三拜……………八

2 嚙金葉茶三拜……………八

七 兩班開列……………八

八 維那檢爐……………五

九 維那揖請……………七

十 大眾九拜……………八

十一 兩序焼香の仕方……………九

十二 住持胡跪、維那宣疏……………九

十三 學經と遶行……………九

十四 回向と散堂……………九

第九章 献茶湯式……………九

一 諸菩薩奉齋……………九

二 中揖三拜……………九

第十章 疏と回向文の大意……………九

一 緒言……………九

二 佛誕生會疏……………九

三 涅槃會疏……………九

四 成道會疏……………十

五 達祖忌疏……………	二〇
1 原文と作者……………	二〇
2 教相の薬毒……………	二〇
3 正傳の佛法とその正脈……………	二〇
4 二祖の斷臂得髓……………	二二
5 作者の願意……………	二三
六 高祖忌疏……………	二四
七 大祖忌疏……………	二五
八 兩祖忌疏……………	二六
九 各寺開山忌疏……………	二九
十 諸回向の大意……………	三三
1 三佛會回向……………	三三
2 兩祖諷經回向……………	三三
3 尊宿世代回向……………	三三
4 亡僧回向……………	三六

佛祖諷經の仕方

茂木無文

第一章 總序

一、佛祖の意義

1、三世の諸佛

佛祖とは一體何様を指すのであるかと云ふことは頗る廣汎な問題で、一寸即答に苦しむ位である。一口に三世の諸佛、歴代の祖師などと申してゐるが、歴代の祖師は云ふ迄もなく十人二十人位の小數ではないが、三世の諸佛に至つては、其の數殆んど無限であると申してよい。お互が毎朝お勤めをする際に祖堂諷經で五十七佛を奉唱するが、過去七佛から釋迦牟尼佛續いて歴代の祖師、各寺の御開山歴住を経て最近の世代又は先師に至るまで大抵八十幾代かを唱へ續けるのであるが、これは單に法脈を相續せられた歴史上の佛祖に過ぎないので、所謂三世の諸佛と申せば決してこれだけに止るのではない。三千佛名經など云ふお經もある位で具象化された佛名だけでも實に莫大な數に上るのであるが、勿論これは教義上の諸佛であつて實在なされ

た歴史上の存在ではない。尤も我宗の宗乗から云へば其の最高の目的が即身是佛の實現にあるのみならず、草木國土悉皆成佛とあるのだから、森羅萬象苟も此の世に有りと有らゆる一切の物が皆同一法身の顯現である。それと同時に一切の物象そのままに法身そのものと見らるべきものであるとしたなら、諸佛の數は實に無量無數那由他阿曾祇とでも申すやうな事になる。

2、禮佛の態度

斯る無量無數の諸佛に對して假りに我他彼此の差別觀を逞しうするとしたら、夫れこそお互の一生や二生で到底拜み盡せるものではない。されば諸佛を對象的に——自分とは根本的に別個の存在として取扱ふ段になると結局妙な事になつてしまふのであるが、幸に我宗では左様なへまな事は教へないのである。宗乗の講釋は頗る難しくもあり又今は敢へてその任でないから差控へて置くが、兎も角佛祖に對する態度も差別觀を以てしてはならないのである。能所泯絶とか自他一枚とか云ふ言葉はお互の日常口にする處で、佛祖を禮拜するにしても能禮所禮性空寂で、我と佛祖と一枚になる處に眞の禮拜の意義が現れると云ふ事を常に念頭に置かなくては

ならないのである。この念慮は常に諸佛禮拜の砌だけに止まらず、諸天善神を拜む時でも又大小神祇に對し奉つた時でも矢張同一であるべきで、能禮の自分と所禮の神佛の間に聊かでも溝渠が生じては眞の信仰ともならず、従つて救はれもせず又祈つても甲斐なき事に終らねばならない。話が甚だ理窟つづくなつて來たが、さて然らば我宗で所謂佛祖と申すのは何様を指すのであるか、これを明らかにして置かなければ根本問題解決の運びが附かない事になる。

3、本尊様

佛祖と一口に約めて唱へ慣はして居るが、之を詳しく申せば三世十方の諸佛及び歷代傳法の祖師と云ふ事になる。然し前申す如く無量無數の諸佛を無量無數の儘で禮拜すると云ふのも、お互平常の心境上妙な氣もするので、何様か代表的の一佛をお定め申したくなる譯で、茲に所謂本尊觀が生じて來るのである。處で此の本尊觀を打ち建てる爲には佛經五千餘卷の中から自分の理想に最も適合した部分を抽出して、これこそ實に釋尊御出世の本懐と存じ奉るに依つて自分はこれを所依とし宗旨として我も信じ人にも信ぜしめようと云ふ處から、宗派と云ふも

のが生じたものと思ふ。經文の判定即ち判教が各宗建立の根本義であると同時に、判教には自然本尊觀が附物となつて來る。であるから宗旨が違へば従つて本尊様が違ふと云ふ事になるので、阿彌陀如來を本尊様と崇める宗旨もあれば大日如來でなければならぬと云ふ宗旨も出來、又法華經こそ釋尊出世の本懷をお説きなされたものであるから、これを本尊として南無妙法蓮華經と唱ふべきであると主張する宗旨も生れると云ふ次第で、一宗には必ず開宗の祖師即ち宗祖と、宗祖の判定を下された判教と本尊觀とが附いて廻る譯である。

二、我宗の本尊觀

然らば我宗では如何なる判教と本尊觀とを主張するかと云へば、古來禪家では「不立文字」を標榜して居るので經典教相などは始めから相手にしない。従つて他宗他門の如く何經に依つて宗旨を建てたと云ふ事はないのであるが強いて申せば「不立文字教外別傳、直指人心見性成佛」と云ふ判教に依つて宗旨を建立して居るのであるとも云へる。否この十六字こそ實に禪宗

の判教そのものであると申して差支へないのである。

所依の經典が無いのであるから經典に依る本尊様も従つて無い譯であるが、教外別傳の宗旨は抑も何様から傳はつたかと云へば勿論教祖釋尊でなければならぬ。釋尊は實に歴史上の人物であらせられると共に、清淨法身の御佛たる釋迦牟尼如來であらせられるから、これを御本尊と崇め奉るに不思議はない事になる。然し單に歴史上の釋尊と云ふお方、即ち人間であらせられたお方を其儘人本尊として信仰するとあつては少々妙な事にもなるが、釋尊即ち法身佛と見る點からすれば三世の諸佛は皆釋尊一佛に攝せられるから、釋尊以外に別な諸佛を立てるにも及ばず又何佛を立てやうとも何菩薩を拜まうとも結局釋尊の分身を拜むことになるから一向に差支へはないのである。禪家で、本尊様の外に、種々なる佛菩薩或は諸天善神を祠つて居るのは斯る立場から致すことで、決して多神的の仕方では無いのである。「修證義」の末尾に、

謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ即身是佛なり、過去現在未來の諸佛共に佛と成る時は必らず釋迦牟尼佛と成るなり、是れ即身是佛なり。

と仰せられてある如く、我宗の眼から見れば三世十方一切の諸佛菩薩は總て皆釋迦牟尼佛であらせられると觀て差支へないのである。

八

第二章 佛祖諷經の實際

一、三佛會

釋迦牟尼佛は三世諸佛の代表佛として是を我宗の御本尊と崇め奉つて居る所以は、右様の次第で略ぼ納得もちとくされるのであるが、緒さそその釋迦牟尼佛は一面人間の如來として人間に同じて、二千五百年前印度の迦毘羅カピラ城の太子として降誕せられ、出家修行、降魔がうま成道、說法教化せらるること四十九年、八十歳の人壽じんじゆを全うして入涅槃にらねはんなされたのである。處で我宗では法身ほつしんの釋迦牟尼佛を仰ぐと共に現身の釋尊——人間の如來として人間に同じて此世に出現なされた釋迦佛をも仰ぎ奉るので、法身佛と現身佛とを別なお方とは考へないのであるから、現身佛の降誕、成道、涅槃即ち御生存の三大要點を三佛會さんぶつえと稱へて、之を宗門最大の聖日と定めて居るのである。謂ゆる佛祖諷經の佛に屬するものは即ちこの三佛忌を指すのである。

釋尊の御誕生は今更申す迄もなく、花笑ひ鳥歌ふ陽春四月の八日である。現今ではこの聖日

九

を「花祭り」と稱して全國津々浦々に至るまで奉祝するやうになつて來たが、明治維新の直後には謂ゆる廢佛毀釋の爲めに、この聖日も國民の記憶から喪却されんとして、各宗の寺々で僅かに甘茶の接待位で村民の注意を呼び起すに過ぎぬ程衰微して居たのであるから、二月十五日のお涅槃や、十二月八日の成道會などは普通の村民は愚か、寺院でさへも忘れ勝ちな位であつたのである。

兎に角、我宗では佛様と申せば釋迦牟尼佛、佛忌と申せば三佛忌を指すものと思つて差支へない。勿論釋尊以外の佛菩薩なり諸天善神なりを祭祠して悪いと云ふ事は無いが、今佛祖諷經に際しての佛と云ふのは三佛忌の略稱位に考へて宜しいと思ふ。

二、達祖忌と兩祖忌

さて然らば祖とは何様を指すのであるかと云ふ問題になるが、歴代の祖師と申せば第一の祖師迦葉尊者を始めとして、天竺即ち印度だけでも二十八祖、支那へ來て天童如淨禪師迄で二十

二祖、我邦の高祖様から太祖様まで四代、各寺の開山中興尊宿などを合せると中々多數に上るのであつて、然も何れも皆歴代の祖師ではあるが、之等を一々別々に御供養申すと云ふ譯には行かない。尤も毎朝奉唱する五十七佛の名號は以上に述べた天竺の二十八祖と支那の二十二祖に毘婆尸佛以下の七佛を合せたものであらうから、結局毎朝過去七佛から歴代の祖師に御回向申しては居るのであるが、佛祖諷經としての祖師は、我宗としては兎に角禪家の初祖であられる達磨大師と、日本曹洞の開祖たる高祖承陽大師並に太祖常濟大師の御三方を指すものと心得てよいのである。震旦（支那）初祖菩提達磨大師は、印度にお生れなされたお方であるが、後支那に渡來なされて禪宗を開き、大法を二祖慧可大師に附囑の後、隻履再び印度に歸られたと云ふ傳説が残つて居る。然るにその御命日が十月五日であるから此の日を達磨忌と稱へて古來禪家の聖日と定められてある。

次に高祖大師は建長五年八月廿八日に御遷化であり、又太祖大師は正中二年八月十五日の御遷化であるが、之を太陽曆に推歩すると、共に九月廿九日に當るので、この日を兩祖忌と申して宗門の聖日と定められてあるのである。

上來述べ來つたやうな次第で我宗では釋尊の降誕、成道、涅槃の三佛忌と、達磨忌及兩祖忌とを一口に「二祖三佛忌」と申して居るので、宗門の佛祖諷經と云へば先づ以てこの二祖三佛忌の法要を指すのであると合點してよいのである。尤も各寺の開山忌や前述五十七佛中に在る特殊の祖師即ち六祖慧能大師とか洞山悟本大師とか天童如淨禪師等の御征忌を營む向もあるが、これらも勿論佛祖諷經として取扱はるべきものに相違ない。然し各寺の開山忌以外は二祖三佛忌のやうに必ず營むべき限りではないのである。

そこで佛祖諷經には一體どんな法要を行ふべきであるかと云ふ問題になるが、行持軌範には獻粥諷經、出班燒香と記してある。獻粥諷經は兎も角、出班燒香は頗る莊重な法式で、従つて其の進退も甚だ面倒であるから、詳細は別頁に記述するとして、茲には出班燒香なき場合に於ける三佛忌諷經の事を述べて見よう。

第三章 三佛會詳解

一、諷經と讀經

一體諷經と讀經とは同じ事か違ふ事か、違ふとすれば何處が違ふのかと云ふ疑問が起つて來るが、結局これは言葉の違ひだけで内容に區別は無いやうに思ふ。僧侶同志では讀經することを諷經と稱へて居るが、在俗の者は讀經と云ふて居る。又看經といふ言葉もあるが、これも矢張讀經の事である。暗誦のお經は諷經で經本を看て讀むのは看讀又は看經であつて讀經と云ふのは俗呼びであると云ふ人もあるが、少々理窟に走つた説明かとも思はれる。何れにしてもお經を上げる事に相違ないから、強いて區別するには及ぶまいと思ふ。

一、三佛會に讀む經咒

閑話休題として三佛忌の話に立ち戻るが、三佛忌のお経は、楞嚴咒即ち大佛頂萬行首楞嚴陀羅尼だらにを読むことになつて居る。このお経は大悲咒だいひしゆや消災咒せうさいしゆと同様、音譯の陀羅尼文で、勿論讀んでも意味は解らない。音譯と云ふのは梵音即ち昔の印度語を其音の儘漢字に當てたのであるから、發音の不備や譯字の無理の爲に原音は全然訛なまつてしまつて、梵音其儘の意味は殆んど滅却されて居り、而も漢字で並べてあつても意味は無いのであるから結局梵語とも支那語とも附かない、謂はゞ日本化した梵音とでも云ふべきもので、意味は解らないが只々神聖なもの、釋尊の金口こんくその儘のお経として頗る尊重されて居るのである。處が大悲咒だいひしゆや消災咒せうさいしゆは短くもあり且つ又小僧の入門第一に教へられる程、僧口に喩くわいしや炙して居るので、宗門の坊さんなら大抵の者は暗誦に差支へないが、楞嚴咒りやうごんしゆと來ては長篇でもあり且つ又日夕用ひる場合が尠いから、現今學校出の若僧中には之を讀破し得る者は殆んど無いと云つてよい。従つて三佛忌と雖も他のお経で間に合せる外無いことになる。

三、佛誕生會—灌佛會

佛祖諷經には献茶湯けんちやとうが附き物となつて居る。献供の事も、逮夜たいやには蜜湯、朝は献粥、午時に献茶湯と云ふやうに夫れ々々極きまつた規式はあるが、本山や大僧堂でない限り、夫れ程迄に嚴修することは容易でないから、普通寺院の法要としては献茶湯位で我慢するより外は無い。尤も三佛忌中でも四月八日の降誕會には、誕生佛を嚴飾して灌佛することに極きまつて居るから献茶湯以外に灌佛の設備をしなければならぬ。献茶湯の事は別に述べるとして、先づ以て灌佛の設備に就て述べよう。

灌佛に必要な花御堂、誕生佛、甘露盤などは大抵の寺院に昔から備へてある筈だから、今更新たに調達の必要は無いとして、花御堂は從來自然の生花を集めて葺ふき飾る事になつて居たが、大陽曆では四月八日には野の花が未だ咲き揃はない。止むを得ず造花で葺ふいたり又は御堂の屋根を漆塗うるしぬりにし金箔等きんぱくを施して改めて葺ふかずとも立派に莊嚴された體裁ていさいに製作したりなどして

生花に替える向が多くなつて居る。それは何れでも其寺々々の意樂に任せるとして、兎に角花御堂を飾り、甘茶を煮て灌佛盤に盛り、中に誕生佛を安置して、小杓を備へて灌佛するのである。

灌佛に甘茶を用ひるのは古來の習慣と見えるが、香湯でなくてはならぬのであると云はれて居る。香湯と云ふのは桃李松柏柳の五木に香木と云ふから栢檀、沈香の類を加へて煎取するのであると云ふ。これは瑩山清規の所定であるから末世のお互は謹んで遵守すべきであるが、然し永い間の習慣で甘茶でなければ參詣の善人が承知しないし、又香湯の煎取よりも甘茶の煎出の方が簡單であるから、矢張甘茶で胡魔化すのもよいであらう。然し道心の方は手敷を吝まらず謹んで香湯を製作するに越した事は無い。

四、佛前の供具、七文錢

花御堂即ち花亭の設備——これは前日即ち七日中に用意すべきである——が出来たなれば、

之を本堂正面の前卓に安置するのであるが、その以前に本堂を洒掃莊嚴して華燭を改め、茶菓湯等を献備すべきは云ふ迄もない。本來なら式に依つて献茶湯を行ふべきであるが、これも和尚と小僧との掛け向ひでは行じ憎いから、止むなく置茶湯で勘辯して頂くのである。茶湯器は大抵朱塗で出来て居るから、これに直接熱湯を注ぐのは宜しくないに依つて、小さな陶器の中に入れて置くべきである。湯は砂糖湯、茶は原料の儘少々摘み込んだものへ熱湯を注ぐのである。菓子には「三ツ菓子」と云ふのであるから、其の種類の如何に拘はらず必ず三箇を備ふべきである。茶菓湯の外に靈膳、生果其他の供物を辨備すべきは勿論であるが、これは其寺々々の便宜に従ふべきで、必ず何々を備へねば成らぬと云ふ事はない。

本山その他の大叢林では七文錢と唱へて、大衆から金七厘づつを集め、之を常住に納めて相當の供物に替へて備へると云ふ規定があるが、現今では七厘と云ふ金錢は取扱ひに困るので大抵金壹錢を徵發するやうである。然し普通寺院には大衆も居らず、と云つて内典や子女から金壹錢づつ徵發するわけにもゆかないから斯る制度のある事だけを承知して、常住で何か蒸菓子でも調へ「大衆九拜」として献備するなどは最もよいと思ふ。

處で以上の献供は花亭を須彌壇の中央に安置して其の前へ備へるのが正當であるけれども、普通の寺では法要の後に花亭を八尺間（本堂長椽の中央）に持ち出して、一般人の参拜灌佛に便する習慣になつて居る所から、非法乍ら夫れ等の便宜の爲に特に前卓に安置することにしたのである。

五、灌佛會式典と回向

さて右様の諸設備が整ふたならば、小鐘を三會鳴らして諷經に掛るのであるが、普通の寺院殊に二三の衆では出班焼香は出来ないから、小鐘に従つて上殿三拜、導師上香了つて大磬三聲で灌佛偈を唱へる。

灌佛偈

我今灌沐諸如來 淨智莊嚴功德聚

五濁衆生令離垢 同證如來淨法身

これを唱へるには第一句は維那即ち擧經者が單獨で唱へ、第二句から一衆同和して、第三句に至つて導師進んで杓を取り浴佛して歸位する。斯くて唱偈三返の間に一衆同様に進歩焼香灌浴し終つて楞嚴咒繞道と云ふのであるが、楞嚴咒は兎角不得手とあつて代りに大悲咒を讀み小衆だから遶行も止めて單に立讀にする。唱偈にあつても之に所定の節を附けて聲を引くのであるが、それは聲明に屬する事故、茲で説明も出来ないが、只一字々々聲を引くだけでもよい。諷經終つて次の回向をする。

回向

淨法界の身 本出沒無し

大悲の願力 去來を示現す

仰ぎ冀くは眞慈 伏して照鑑を垂れ玉へ

大日本國某府縣某市郡某町村某山某寺住持遺教比丘某甲

今月初八日伏して本師釋迦牟尼如來大和尚降誕の辰に値ふて虔んで香華燈燭茶菓湯饅を備へ以て供養を伸ぶ、謹んで現前の比丘衆を集め、同音に大悲心陀羅尼を誦誦す、集むる所の殊勳は上慈恩に酬いんことを。伏して願はくは、寂照圓明にして四種波羅密の妙徳を修證し、常住堅固にして六義薄伽梵の最勝を獲得せんことを。

一衆同音に「十方三世」云云、三拜散堂。これで四月八日佛誕生會法要を終つた譯である。

六、灌佛會の宣疏

ここでは出班焼香を略したので勿論宣疏の式もないのであるが、宣疏の事も屢々讀み習はないと板に附かないから、三佛忌の如き斯様な機會に於て變則乍ら住持なり維那位に立つ者なりが讀み習ふやうにすると宜しい。宣疏の法は頗る面倒であるが、それは出班焼香を述べる時に詳説するとして、今は只略式に讀むだけを主とする事に致さうが、然し疏の作製即ち書き寫す

位の事は行つた方がよからう。原文は第十章に全部載せてあるが、例に依つて延べ書きにして置かう。

誕生會疏

淨法界の身本出沒無し大悲の願力去來を示現す。仰いで照臨を願ひ俯して眞慈を

請ふ。(これ迄は小聲に讀み、以下中聲に)

今月初八日恭しく本師釋迦牟尼如來大和尚降誕の辰に値ふて虔んで香華燈燭茶菓湯饅を備へ以て供養を伸ぶ。仍て現前の比丘衆を集め同じく灌浴し奉り大佛頂萬行首楞嚴陀羅尼を誦誦す、集むる所の殊勳は、上慈蔭に酬ゆる者なり。(以下稍々大聲に讀む)

右伏して以れば

曇華瑞現して徧界の香氣曼引たり、赫日質ち麗うして滿天の光輝普く照す。

三祇却滿の最後身、四八莊嚴の大妙相。

是れ凡是れ聖、悉く皆歸仰し、天上天下唯我獨尊。三百餘會の法雨潤ひ遠く浴し、二千

餘年の徳風響き久しく扇ぐ。

仰ぎ願くは、毫光來際を益して福業塵沙を利せんことを。

伏して請ふ、心華滿地に開きて莊嚴法界に敷かんことを。 謹んで疏(聲を引く、次は小聲に)

本師如來これとき 維時曆何年四月初八日、何山何寺住持遺教比丘某 謹 疏

最後の「謹んで疏」と云ふ語は前の同字よりも更に大聲に更に聲を引くを法とするのである。以上極めて大要だけであるが三佛會中降誕會だけ終つた譯である。

七、佛涅槃會

曆の上から云へば三佛會中、二月十五日の涅槃會が最初に來るのであるが、都合上降誕會を先に述べたから續いて涅槃會を説くことにする。涅槃會も法要の順序とか獻供の品々とかは降誕會と全然同じで差支へないが、只誕生佛の代りに涅槃像を掛けるのである。お生れになつた

歡びに引き替へてお隠れになつた悲しみと云ふ事になるので甚だ困るが、「沙羅雙樹の花の色は生者必滅の理を現はす」とかで、浮世の變轉限りなき有様を如實に示現し玉ふ佛陀大悲の顯現と有りがたく奉拜するより外はないと思ふ。

諷誦の經咒も降誕會と同じでよいが只回向文を「大般涅槃之辰」と改めるだけである。尤も宣疏の場合は「右伏以」以下の文句が全然違ふから、別に擧示する必要がある。即ち「淨法界の身」乃至「上慈蔭に酬ゆる者也」迄の中、降誕の辰と云ふ所を入般涅槃の辰とすれば宜しいとして、

右伏して以れば

常在靈山の微月は幽光遠く輝き

泥洹雙樹の殘華は餘薰尙ほ郁し

涅槃常樂の接化今時に迄り、無爲實相の徳用、來際に被ぶる。是を以て

上乘一心の法供養、面々五十二類の供具を捧げ、萬行首楞の秘密咒、各々異口同音の佛事を作す。伏して願くは

法界遍く無量聲光の告に驚き、群類悉く如來常在の化に預らんことを。謹んで疏

以下凡て降誕會の時と同じである。

當日の法要はこれで宜しいのであるが、お涅槃に限つて二月一日から十四日に至るまで毎夕念經の代りに遺教經を讀むことになつて居る。無論これは大叢林での行持ではあるが、然し普通の寺院でも都合の付き次第矢張これを行ふのがよいのである。尤も現今普通殊に中以下の貧地では、生活に追はれるとか、その他の事情に依つて種々の副業に従事する者が多くなつて居るから、朝課の御勤めは曲りなりにも行ふとしても、晚課即ち念經を勤める者は殆んど無い位である。但しこれは重に關東地方の古來無佛性の土地を標準としたのであるから、關西や北國の如き佛國筋をも同一に律する譯には行かない。従つて年中眞面目に念經まで勤めて居る寺院では、上述の遺教經讀誦を以て念經に替へるべきである。然しこれは日課に屬する勤行で、別段取り立て、云云する程の法要ではないが、念經の代りであるから、小鐘を以て上殿三拜、直ちに遺教經を擧して坐讀し、次で舍利禮文三返、普回向で三拜散堂と云ふ程度でよいのであ

る。此で注意すべきは、遺教經を擧するには必ず「佛垂般涅槃略說教誡經」と擧すべきで、「佛遺教經」などとやつてはならぬと云ふ事である。

1、涅槃像の事

二月一日から毎晩讀遺教經を行ふからには、是非とも涅槃像を掛けなくてはならない。否古來各寺院とも二月に這入れれば直ちに之を掛けて日々香華を供ふる習慣になつて居るので、現今でも、氣の利いた寺では斯く行つて居るやうである。一體涅槃像（涅槃圖とも云ふ）と云ふものは其寺々に依つて大小長短其他の相違はあるが、苟も寺院であるからには必ず一幅を所藏してあるべき筈である。されば今更之が繪解きの必要もあるまいが、兎に角釋尊入涅槃の像を圖示したので、繪中の人物や風物の上から見て支那で創作されたものであることは疑ひない。尤も多くの佛像佛畫は大抵支那の風俗を基本として捏ち上げられたもので、印度傳來その儘と云ふのは殆んど無いと云つてよい。涅槃圖もそのお多分に洩れない事は是非もない事である。何れにしても人壽八十歳におはした釋尊は印度拘緡羅城外の跋提河の畔、沙羅雙樹の間に

於てまだ肌寒き二月十五日夜半、急に腹痛を感じられ、隨侍の御弟子阿難尊者に命じて坐具を展べさせ、これに横臥なされて將に臨終に垂んとする時、中夜諸の弟子の爲に略して教誡を遺し玉ひ、除るに涅槃に入り玉ふた光景を描いたものである。この御教誡が即ち佛遺教經である。處で印度は常夏の國であるから、沙羅樹と雖も全部落葉する筈は無いのであるが、立ち並ぶ雙樹の半分が枯れて居るのは、釋尊入涅槃に殉じたのであると云ふ。而して半分生きて青々して居るのは、兜率天に再生せられた母君摩耶夫人が雲に乗つて回生の靈藥を齎したが、間に合はないので、從者をして投下せしめられたその藥氣を感じて蘇生したのであると云ふのだ。靈骸を取りまく諸弟子諸菩薩、諸天善神乃至禽獸昆虫の類は三界一切の群類を表示したもので、釋尊御涅槃と聞くや皆取り敢えず馳せ附けたものであるとの事。悲報の傳達は如何なる機關に依つたものか、頗る迅速に行はれたものである。

涅槃圖は少にしては普通の床に掛けられる程度のものから大にしては數十尺に上るものもあり、圖様も千變一律ではあるが、大抵肉筆であるから夫れ々々小異の點がある。殊に相集つた諸動物に至りては繪師に依つて種々に描いたものと見えて一定されてゐない。前にも申す通り

元來が支那製のものであるから、全然想像から出たもので、これが釋尊入滅當時の狀景で候と云ふには、文明の今日頗る妙な氣もするのであるが、然し寺院としては寧ろ神聖なるものとして禮拜の對象とすべきものであるから、批評がましい事は絶対に避くべきものと思ふ。

2、涅槃團子其他の献供

關東地方ではお涅槃に際して、寺院で團子を作り、之を參詣の者に頒與する習慣がある。或は全國的に行はれて居るかも知れないが、筆者寡聞にして詳細を知悉しない。そこで四月八日の甘茶接待と同様、二月十五日には團子の接待を行ふ譯であるが、東北地方には之を多量に而も種々な形に作つて屋上から投げ降らす處もあると聞いて居る。されば涅槃會の献供としては此の團子なるものが、必須不可缺のものとなる譯である。

處で涅槃像は須彌壇に掛けられぬ程大きなものが多いから、露柱の前とか西序の後とか、或は八尺間など須彌壇外の適當の場所へ掛けるのであるが、茶湯其他の献供は圖前に供ふべきか、それとも矢張壇上にすべきか一寸迷ふのである。「行持軌範」には「涅槃像を壇上に掛け云

云」とあるから、これなら別に問題は無いけれども、小寺では壇も小さく狭いから、従つて問題が起るのであるが、愚見を以てすれば、圖前には僅に華爐燭位の献備に止めて、茶湯其他は矢張り壇上即ち本尊前に供へ、誦經も凡て壇上に向つて行ふべきものと思ふ。尙涅槃會修行に就ては各地方に夫れ々々異つた風習がある事と思ふが、それは其の地方の慣行に隨順して然るべきものと思ふ。

八、成道會法要

次に三佛忌の最後として成道會に就て述べて見よう。成道會は十二月八日に行ふのである事は既に解つて居るが、これは釋尊が苦行の徒勞に過ぎざる事を悟られて、山を下り尼連禪河に沐浴して少女の捧げた乳糜の供養に依つて身勞を恢復せられ、菩提樹下に端坐して見明星大悟なされた聖日であるから、其の聲に倣ふと云ふのか十二月一日から「お七夜」と唱へて八日の早朝まで連夜説教を行ふ地方もある。然しこれは「行持軌範」に規定された事ではなく只地方としての慣行であるから其の法式次第の如きも慣例に従つて任意に行つて差支へない。成道會當日午時出班焼香とあるから凡ての法式進退は降誕會や涅槃會と同じであるが、宣疏の文句は全然違ふ事になつて居る。

成道會疏

大圓滿覺、跡を西乾に垂れ

心大虚を包んで、量沙界に周し

仰いで照臨を願ひ、俯して真慈を請ふ。

大日本國云云（こゝは涅槃會のと同じでよい）

今月初八日恭しく、釋迦牟尼如來大和尚成道の辰に値ふ云云（以下上慈蔭に酬ゆる者也迄前同様である）

右伏して以れば

瓶盤釵釧を融じて一金と爲すも智火に非ざれば克くすること鮮し、

琴瑟箏篋を校へて以て六律に諧ふも妙手を捨て、奚をか爲さん

蓋し衆生如來の智慧徳相を具すること有るも、若し大覺衆生の迷悟を示すの便なくんば、演若の狂性歇み難く力士の額珠永く忘れん。

今大地有情の成道を聞いて、新に本有佛性の正因を明らむ

慧照永く輝いて一燈百千燈に傳へ

道風久しく扇いで此界無邊界に洎さん、謹で疏。

(以下總て前同斷で宜しい)

宣疏を爲さぬ場合には、降誕會の條下に記した回向文を唱へれば宜しい。軌範に成道會には壇上に出山如來像を掛けるとあるから、謹んで遵守すべきであるが、出山像は各寺院に屹度有るとは限らない。されば出来るならば機會を見て一幅を備へて置くべきである。今更に出山像の講釋でもあるまいが、これは釋尊が山中での苦行に見切を付けて山を下り尼連禪河に向はせられる當時の御姿で、瘦軀に綱縷を纏はせられ、お顔も頗る憔悴して見るからに痛々しく、難行

苦行さこそと偲ばれるお姿である。降魔成道なされたのは、此後御身の疲勞を恢復されて菩提樹下の獅子王座に端坐なされてからの事であるから、出山のお像は成道の前提でこそあれ、成道そのものでは無いのであるが、今は慣例に従つて此の像を掛ける事になつて居るのであらう。三佛會に限つて會と忌とを混用して居る。即ち成道忌とも云ひ成道會とも云ふし、降誕會とも云ひ又誕生忌とも云つて居るが、これは如何やうの理田か知らないが、別に變つた意味では無い。只古來兩様に云ひ慣らして居るので忌とも會とも云ふて居るのであるが、忌と云へば多く御命日を指すことになるから、降誕、成道と云ふ目出たい聖日を含んで居る點から見ると云はず會と云ふ方が正しいのであらう。軌範には降誕會乃至成道會と書いてあつて忌とは云ふて居ないのである。三佛忌に就ての記述は以上で大凡盡きた事と思ふ。尙この外に地方々々で特殊に行はれる諸種の行持があるであらう。例せば前述のお七夜とか又大本山始め諸方の大叢林で行はれる成道會攝心とか、涅槃會に因む諸種の習慣とか、降誕會に就ての種々な仕來りなどは、一々取り立てれば際限もない事であらうが、佛祖諷經の記述としては上來述べ來つた所で略ぼ遺漏はあるまいと思ふ。

第四章 一祖忌解説

一、達祖忌

1、達磨様

三佛會に次いで宗門で最も重要な聖日は達磨忌と兩祖忌とである。達磨様と云へば歴代の祖師中で此のお方ほど我國民に親しみを持った方は無いのである。達磨祖師は東印度香至王の王子であらせられたが、第二十七祖般若多羅尊者に就て出家得度なされ、初めて教外別傳の宗旨に悟入なされて、後支那に渡來して梁の武帝に謁見、其の宗旨をお傳へする積りであつたが、不幸にして武帝の機根に契合しなかつた爲め、退いて魏の國、嵩山の少林寺に蟄居なされて獨り坐禪辨道なされること九年の久しきに及んだとの事である。茲に震旦第二祖正宗普覺大師慧可和尚を獲て、之に大法を附囑し、その後梁の大通二年十月五日に遷化なされたのであるが、幾ばくもなく蘇生して、西天に歸られたとの事である。大師入寂の後、魏の國の宋雲と云ふ人

が西域からの歸途、葱嶺と云ふ處で跣足の儘、手に履の片方を提げて西に向つて行かるゝ大師に逢ふたから、「どこへ行きなされる」と問ふたら西天に去ると答へたとある。仍て其後お墓を發いて見た所、片方の履だけ残つて居たと云ふ。頗る怪しげな傳説であるが、「隻履歸西」と云ふ言葉を以て達祖入滅の意味を現はして居るのは此の傳説に基いたものである。

2、日本渡來の達磨様

大師は其の後我が日本に渡來なされて大和の片岡山と云ふ所で天皇のお目に觸れ、袞龍の御衣を賜はつたとあつて、日本に於ける大師の像は皆此の御衣を纏ふて居るのである。爾來民間に流布して居る達磨は皆眞ッ赤な着物を着て居るが、これは袞龍の御衣から來たものであると云ふ。これも餘り當てにはならぬ話であるが、兎も角も達磨様と云へば縁起の神としてお正月に無くてはならぬものとなり、又繪畫に翫具に文學に、果ては商店の看板に至るまで社會の各方面に出現して民衆に無限の親しみを携つて迎へられて居る事は争はれぬ事實である。然し此の達磨様が我が禪家の開祖であり、従つて史上實在の人物であられた事まで知悉してゐる者は、

坊さん以外には餘り多く無い。だから十月五日の達磨忌が曹洞宗の聖日で、毎年嚴かな供養法會が行はれるなど云ふ事は、宗門の檀信でも知つて居る者は先づ勘いと思ふ。斯様な點から考へても宗門寺院としては此の日をおろそかに致さぬやう心がくべきであらう。

一、達祖忌法要、迎眞諷經

さて達祖忌の法要も、その仕方は三佛會と同様で差支へないのであるが、別に迎眞の式と云ふがある。三佛會には花亭の安置又は涅槃像の挂方に就て別段その式は定められて居ないで、只係りの衆が適當に裝置すれば夫れでよいのであるが、達磨忌及兩祖忌（假りに之を二祖忌と呼ぶ）には、法式に依つて眞牌をお迎へする事になつて居る。

この法要は凡てお逮夜即ち前日に行ふのであるが、前日の齋罷と云ふから午飯後に、殿鐘三會一衆上殿、七下鐘に従つて住持入堂して南面、即ち本尊を背にして立つのである。この時先導の者引磬、次に鼓鉦、次に兩序と并列して祖堂に上り、大衆はその儘法堂に留る。祖堂に入

つて住持進前焼香三拜了つて坐具を收むる時鼓鉦三通、住持進んで眞牌を奉じて南面、入堂の時の順序にて出堂して法堂に向ふ。途上鼓鉦を鳴らすこと三聲づゝ數次して住持須彌前に至れば侍眞迎へ接して眞牌を壇上に安ず。時に鼓鉦三通、住持焼香歸位、普同三拜（一衆同時に三拜すること）、献茶湯、維那大悲咒を擧して一衆同音、諷誦終つて次の回向を唱ふ。

上來諷經する功德は、震旦初祖圓覺大師菩提達磨大和尚の爲にし奉り上慈蔭に酬いとを。

一衆同音「十方三世」を唱和し普同三拜して散堂、これで式を終るのである。迎眞の式があれば送眞の式も無くては叶はぬから、當日晡時（午後三時頃）即ち出班焼香で正當供養の濟んだ後に送眞諷經を行ふのである。式は迎眞の逆にやればよいのであるが、此の時は大衆も共に祖堂に上るのである。又献茶湯でなく只献湯するのみとある。

兩祖忌の時も右と同様迎眞送眞の式を行ふのであるが、住持眞牌を奉持するに當つて、高祖太祖を一度に奉ずる譯に行かず、殊に兩祖忌には別にお像をも迎へなければならんから、御像

と太祖眞牌とは豫め侍眞知殿に於て法堂に請じ置き、高祖眞牌だけを住持が奉持する事にしてある。

三、達祖忌の疏

宣疏の冒頭は三佛會二祖忌とも全く同じである。即ち「淨法界の身」から「右伏して以れば」に至るまでは御稱號と忌名と經名とが違ふだけで外は皆同じであるが、二祖忌に際しては住持自身を「法孫比丘某」と云ふて、三佛會の「遺教比丘某」と區別するのが法となつて居る。では達磨忌の疏を披露すると致さう。

淨法界の身云云 大日本國云云

今月初五日恭しく、神丹（又は震旦）初祖圓覺大師菩提達磨大和尚示寂の辰に遇ふて、虔んで香華燭茶菓湯珍饈を備へ以て供養を伸ぶ。仍て現前の比丘衆を集めて、大佛頂萬

行首楞嚴陀羅尼を誦誦す、集むる所の殊勳は、以て法乳の慈恩に酬ゆる者なり。

右伏して以れば

慧日西のかた鷲嶺に沈んで殆んど一千年

法雲東のかた眞州に簇りて十萬里を越ゆ

是に於て

白馬始めて漢朝の瑞を先んじ、赤烏吳會の祥を紹ぎしより、虬文を翻譯し、經教を流通す。

章疏の科節星の如く繁く、名相の教網雲の如く敷く。

刁刀相似て魚魯辨じ難し。

茲に我が藝祖少林の達磨大師

慈心遠裔を包み、師教遐陬に蒙る。

巨海の驚濤を辭すること罔ふして、荆梁土に遊ぶ。

老蕭の丹臆に契はずして、潜に魏邦に之く。

一葦を重江に泛べ、九年を少室に終ふ。

心印を單傳し、宗綱を直示す。

席上に華を拈す飲光の正脉有り、庭中雪に立つ慧可の得髓疑ひ無し。

法雷既に九州に震ひ、道風遂に四海に扇ぐ。然うして隻履西歸の日に届り、敢て攝齋北面の勤を忘れんや。

今深重の尊徳を仰いで遙かに如在の誠禮を伸ぶ。

觀むらくは來儀に吝ならず、庶くは俯して微供を飲け玉へ。

伏して想ふに

斗筲の陋器、螻蟻の餘生

石鞏の弓を彎くと雖も遂に鹿を的ること莫く、徒に玄沙の鉤を下して曾て魚を得ること

回し。忝く傳燈の遠炎を挑げ以て曩祖の眞前に供す。伏して請ふ

大願力有り眞慈凝ゆること無く、提耳を垂れて安心を獲せしめ玉はんことを

知見を明むること有りて猛省回光し、修證を假らずして頓悟成佛せん。然して後

河は帯となり山は冠となるまで北闕の寶祚無疆を祝し、雲は鶴の如く、雨は膏の如くに

して南畝の黎元有歳を資けん。謹んで疏。

祖師炳鑑 維時曆年十月初五日 某山某寺住持比丘 謹んで疏。

大層長くもあり又頗る面倒な字が用ゐられてあるので、一讀忽ち汗を覺ゆる位であるが、原文に就て其の駢驪の態を味ふと、何とも實に有り難い感じが起るのである。

四、兩祖忌

1、宗祖としての兩祖

曆の上から申せば達磨忌に先立つて九月廿九日の兩祖忌が來る譯であるが、今は都合で兩祖を後廻しとした。然し敢て別段の理屈があるのでは無く、只三國傳來の次第に従つた迄である。即ち、釋尊は天竺、達祖は神丹、兩祖は我國であるから、時代も自然この順になる譯である。

而して、釋尊は各宗の教主であられ、達祖は禪家各派の祖師、そして兩祖は、實に我が曹洞の宗祖であられるから、何れに輕重を考ふべきでは無いが、兩祖こそ眞に日本曹洞の依つて興れる原泉であつて、然も他門他派に關係が無いから、宗門として殊に鄭重に奉侍すべきであると思ふ。

兩祖の御傳記は既に各方面に取扱はれて、宗門人としては小僧時代から耳古く聞かされて居る事であらうから、今更茲に記述の要もあるまいが、然しお話の順序としてもその御生誕乃至御入寂位の事は、更に贅しても敢て邪魔にも成るまいと思ふ。處で兩祖は日本曹洞の開祖であるらると申せば、自然その宗名は何處から出たかを知りたくなる。そこで餘談に亘るやうで甚だ恐れ入るが、一寸宗名の解説に觸れて見る事にする。

2、曹洞の宗名

現存の諸宗は多く其の宗義から宗名を附けて居るやうであるが、天台宗と禪の各宗だけは發祥の地名又は開祖の稱號から來て居ると云つてよいのである。例せば支那の天台山の智者大師

が創立したから天台宗、同じく臨濟山義玄禪師の開闢だから臨濟宗、それから宗義の方では、眞言祕密の宗であるから眞言宗、法華經を所依とするから法華宗と云つたやうな工合である。處で我が曹洞宗は開祖の稱號から來たには相違ないが、曹洞と續いた祖師名は何處にも無い。そこで此は六祖慧能大師の住地たる曹溪山と洞山悟本大師の洞とを結び附けたのであると云ふのが正當の解釋であると云はれて居た。

然し曹洞宗名の起つた當時は、支那に於て禪風の最も隆盛を極めた時で、六祖門下に青原、南岳の兩巨匠を打出し、降つて曹洞、雲門、法眼、僞仰、臨濟の五家が競ひ興つて各々その宗風を擅にしたものである。曹洞の名稱は此の時に出來たので、洞は洞山大師である事は既に明了であるが、曹は曹溪では無く、洞山の法嗣曹山本寂禪師であらうと云ふ説が出て來た。その根據は何かと申せば、五家各々立宗の所依がある。即ち禪門の中で各々の判教に依て宗旨を建立したのである。臨濟の四料揀の如き即ちそれであるから、曹洞も矢張所依の判釋があるべき筈であるが、洞山が正偏功勳の五位説を唱導し、曹山は之を承けて祖述大成した。これが「曹洞二師録」となつて今日に流布して居る。これこそ實に曹洞宗名の由つて起つた所であると云

ふのである。然らば何故に洞曹宗と云はなかつたかと云へば、それは語呂の上から故らに顛倒して用ひたのであると云ふ結論である。何れも附會のやうに聞えるが、五位説を以て宗旨を建立したと云ふ方が、立宗の意味がハッキリするやうに思はれるのである。餘談ではあるが頗る大切な事であるから茲に一言した次第である。宗門としては恐らくまだ決定的には至らないのであらう。

3、高祖大師の御行狀

さて本題に戻つて兩祖の御行狀を拜見しよう。高祖承陽大師は道元禪師諱は希玄と申された。今を距ること七百四十餘年前、正治二年正月二日（陽曆推歩一月廿六日）久我内大臣源通親の御曹子として降誕せられたのである。十二歳にして叔父に當る天台の良觀法眼に就て得度せられ、比叡山横川の首楞嚴院の般若谷千光坊で台密の學を研められ、後洛東建仁寺開山榮西禪師の法嗣明全和尚に從つて禪に參學すること九年、相携へて宋（支那）に渡り、彼地の諸方諸山を遊歴して具さに辛酸を嘗められ、遂に天童山如淨禪師の會に投じて茲に參學の大事を了畢な

されて御歸朝、暫く建仁寺に留錫の後宇治の興聖寺を開創せられたのを始めとして諸方に御移錫、最後に越前の國司波多野義重公の請に應じて志比の莊に大佛寺を御建立、後之を吉祥山永平寺と改められた。實に今の大本山永平寺である。而して建長五年八月廿八日（陽曆推歩九月廿九日）御壽五十四歳で入寂せられたのである。依つて陽曆推歩の日を以て九月二十九日を御征忌と定められてるのである。承陽大師の御諡號は 明治天皇様から御宣下あらせられたので、それ迄は佛性傳東國師と申しあげたのである。

高祖大師は御在世中、御自身の辨道に専念なされて、教線を世上に張ることは甚だ好まれなかつたのである。京都に近い興聖寺は兎角月卿雲客の來遊が多いので大師のお氣に契はず、遂に越前の山奥へ引き込まれた程である。であるから一宗を開創されたけれども、直ちに之を弘通することをなされず、退いて眞の道人を打出することにのみお心を用ひられたので、澤山の御著述や御垂示の筆録が實に等身に餘るばかりである。現今我宗の大を爲して居るのは實に大師の斯る御遺徳に由るものと思はねばならぬ。

4、太祖大師の御行狀

太祖大師は高祖に遅れること凡そ六十年の後、文永五年十月八日（陽曆十一月廿一日）越前多禰の郡司瓜生氏の嫡男としてお生れなされたのである。初め永平二祖懷辨禪師に就いて得度なされたのであるが、後其の法嗣徹通義价禪師に隨侍して大事を了畢し、阿波の成満寺を始めに能登の永光寺、光孝寺等幾つかの寺院を建立あつて、最後に能州櫛比の莊に總持寺を開創せられ、正中二年八月十五日（陽曆九月二十九日）五十八歳の人壽を以て入寂なされたのである。能州總持寺は即ち今の鶴見大本山總持寺そのものであり、常濟大師の御證號は明治四十一年に御宣下あらせられたのである。太祖は専ら高祖の家風を祖述なされて一にも二にも「永平古佛、永平古佛」と仰せられ、御自分の識見など餘り御主張なされなかつた様であるが、明峯、峨山の二高足の門下に傑物多く輩出して教線忽ち全國に張り、遂に今日の宗門を大成したのである。兩祖の御命日が年こそ變れ、陽曆に推歩して共に九月廿九日となるのも洵に不思議な因縁と申すべく、従つて宗門一般では兩祖の御征忌を別々に營むことなく必ず御一緒にお勤めする事

になつて居るのである。然し當該本山に在つては各々別に營むけれども、是れ亦必ず一方を光伴として拜請する事にきめてある。そこで宣疏も高祖忌、太祖忌と別々に出來たものがあるが、一般としては兩祖忌の疏を讀むのが法である。

五、兩祖忌の疏

1、兩祖同時奉修の疏

淨法界の身、本出沒無し。大悲の願力、去來を示現す。

仰いで眞慈を冀ひ、伏して照鑑を垂れ玉へ。

某府縣某州某市郡某町村某山某寺住持法孫比丘某甲

今月今日恭しく

高祖佛性傳東國師承陽大師 大般涅槃の辰に遇ふて謹んで香華燈燭山蔬野茗の微供を具
太祖弘徳圓明國師常濟大師 一般涅槃の辰に遇ふて謹んで香華燈燭山蔬野茗の微供を具
へ特に現前の法孫を集め、恭しく眞前に就いて某經を諷誦す、集むる所の殊勳は、上慈

恩の罔極に酬ゆる者なり。

右伏して以れば

船に南海に跨がる佛法東漸の因縁、錫を北山に留む祖師西來の出處、將軍布金の名勝、擺撥して塵埃の如く、皇帝賜紫の官榮、棄擲して涙唾に似たり。

身心に儉讓を行するのみに非ず、兒孫の爲に専ら福禧を惜むを要す。

靈機を撥轉して通身光明了々たり、大用を繁興して徧界瑞氣綿々たり。

君臣道合して國豊かに珊瑚月を擇び、

父子親密にして屋富み峯槽雲を帯ぶ。

乃ち是れ瞬目破顔の嫡傳、安心得髓の正令に匪ざる莫し。

恩澤恢に布く一萬四千の梵筵、眞風永く扇ぐ五十六億の涼燠。

今大般涅槃の月を迎へ、此に小伊蒲塞の筵を展ぶ。

仰ぎ冀くは蓮目青を垂れ、芹意赤を照し玉はんことを 謹んで疏

兩祖炳鑑 慈悲容納 維時某年九月二十九日何山何寺住持法孫比丘 謹で疏

因みに兩祖各別の疏を記して見よう。

2、高祖忌の疏

(淨法界の身云云以下「慈恩の罔極に酬ゆる者也」迄は前と同斷、但し御稱號は高祖佛性傳東國師承陽大師と申すべきは云ふ迄もない)

伏して惟れば

洞水逆流して巨海の波濤雷を爲し、黃龍電激して普天の雲雨潤を爲す。

曹源の一滴點著して派流繁興し、二株の嫩桂覆蔭して技條鬱茂す。

五家の家風通ぜざる無く、七宗の宗要悉く皆達す。

和漢兩朝の名匠に遍參して、内外顯密の經教を博覽す。

百世の英傑、千古の模範、吾が扶桑の藝祖なる者乎。

第一天を照して日月よりも明かなる眼目有り、大千を觸破して輪寶よりも妙なる法輪を轉す。

仰ぎ冀くは、心眼相照して正徧宛轉し、君臣道合して旁參奉重せんことを。謹んで疏
高祖炳鑑 維時何年九月廿九日 某山某寺住持法孫比丘 謹んで疏
慈悲容納

3、太祖忌の疏

(淨法界の身云云以下高祖忌と同じ、御稱號は太祖弘徳圓明國師常濟大師)

伏して惟れば

見色明心五百生前證果の聖、聞聲悟道三千里外辨紋の人。

是れ非師の剃度、即ち介公の嫡傳。

夢を榎木技頭の破艸鞵に原ねて、而して洞谷開山の統を垂れ、信を松壽林中の舊衣鉢に表して、而して護國補助の功を董す。

二利の行願を立て、一實の宗風を振ふ。

元亨の賜紫、總持を曹洞瑞世の道場に補し、安永の勅黄、太祖に弘徳圓明の嘉號を證す。

更に審にするに

聖主の優詔常山北に聳えて天關の深高宏遠を仰がしめ、大師の徽號濟水南に流れて門派の汪洋氾濫を示す。

伏して冀くは

白石兒を生ずる處、直に誠芹の芳馨を歆け、露柱懷胎の時、更に心香の氣息を通ぜん。謹んで疏。

太祖炳鑑 維時何年九月廿九日 何山何寺住持法孫比丘某 謹んで疏
慈悲容納

六、疏文の作爲と其の規格

抑も此の疏文なるものは一體何人の製作に係るものか又如何なる規格——と云つては少し妙

に聞えるが、お經文の如く一定不變^{ふたへ}猥^たりに改竄^{かいざん}を許さないものかと云ふ事も一寸考へて置かねばならないと思ふ。從來擧げ來つた三佛會、達祖忌、高祖忌の五篇は瑩山清規^{けいざんしんぎ}所載とあるから正に太祖の御親作で、お五兒孫たるものは洵に尊いものとして頂戴拜讀しなければならぬものである。又太祖忌の一篇は卍山錄^{まんざんろく}、兩祖忌のは面山和尚の僧堂清規に出て居るもので、夫れ々々古哲の製作に係るものである。各寺開山忌の一篇は「行持軌範」編輯の際に新作せられたもので、

僻陬^{へきすう}小院の住持に便するのみ必ずしも之を以て一般各寺開山忌の疏とせよと云ふには非ず。

と斷^{ことば}られてある如く、本來は各寺の住持が自作すべきものなることを暗示して居るのである。又、

本文は元と其の一例を示したるまでゆるゑ、其人^{じん}の意樂^{いぎやう}により敕修僧規^{ちよくしゆせうせうぎ}小規の文を用ゐ、又は自製するも妨げなし

とまで云はれてある位であるから、疏文は意樂^{いぎやう}のまゝに自作して差支へないものと斷言出来る。

そこで最近「宗報」誌上に發表されてある戰捷祈願祭の疏及び英靈追弔會の疏などは、各自の引導法語と同じく自作の一例として示されたものと見てよいと思ふ。

然し疏文は元來韻文^{うんぶん}の一變體であるから、その散文の部分は別として「伏惟」以下凡て駢體^{へんたい}に出來て居る。詳しく云へば四字六字又は八字九字と云ふやうに漢字を一對づつに併^なべて而も韻字^{うんじ}を踏んで行くのであるから、餘程漢學の力量が無くては仲々作り得られないものである。又疏文は單に佛祖諷經の場合にのみ用ひられるのではない。近頃でも一方の望刹大山等の晋山式には「門末疏」又は「道舊疏」^{どうきゅうしゆ}など云ふて、新命和尚の高徳を讃へた疏を讀む例が幾らもある。これ等は勿論在來のものでは間に合はないから假令燒直^{かたいひ}し蒸し返^むしでも、何とか押し附けなければならぬのである。

七、疏文の書方

次に疏の書き方に就て一言して置く必要があると思ふ。前申す通り疏は一種の韻文であるか

ら、之をベタ書きにしては甚だ面白くない。そこで昔はその書き方に就て頗る八釜しい規定があつたやうである。僧堂清規には、

疏の闊さ三寸六分に摺て摺数は疏文の長短による。長さは九寸五分、封皮は闊さ四寸五分にて長さ一尺五寸。その三分一の上分五寸に別色の紙を襯ぬ。疏紙の摺りし一版に三行書く。最初の數偈四言四句の短は一行、七言四句は二行に書く。句の間を一字空す。次の南閻浮提より某甲まで字が多くとも一行にかく。次に今月某日より伏値と云ふまで書く。本師釋迦より上げて之辰までかく。虔備より上げて供養までかく。仍集より上げて諷誦までかく。大佛頂より上げて殊勳までかく。上酬より上げて者までかく。右伏以の三字を上より二字ほど下げて、本文は四六なれば上下の二句を一行にして一行づゝかく。長句は一句を一行づゝかく、皆毎句頭を揃えて下の空はかまはず。傍句は前行の下一字空てかき、亦行上にもよし。末句の下一字空て謹疏を書く。次に年月日を上げて下につゞけ某寺住持遺教比丘某謹疏と一行にかく。

と示して頗る面倒らしく教へられてあるが、玄透禪師（永平寺第五十世）は之を駁して「未だ

其の據る所を詳にせず」と罵倒されて居る。

そこで「行持軌範」には、

疏の書き様も一定の法あるに非ず。只僧規の如くすれば維那の宣疏に読み易きまでなり。何れに書くも妨げなし、故に今は書き様を定めず。

と決定してある。であるから必ず斯く書くべしと云ふ程の規則は無いと見てよいのであるが、前申す通り折角の韻文であり且つ又前顯の如く「維那の宣疏に読み易く」する目的から、矢張驪語の句頭を擽げて書くのがよいと思ふ。

八、疏文書方の實例

仍つて甚だ煩累の嫌ひもあらうが、僧堂清規の説に従つて涅槃會疏を書いてその一例と致さう。用紙は奉書と云ふのであるが長九寸五分とあるから普通の糊入でも差支へない。愚見を以てすれば必ず九寸五分に截たすとも又折目の潤さを三寸六分とせずとも適當に折つて書寫に便

すればよいのであるが、體裁上紙の天地左右を空けることは是非とも必要である。又疏が長ければ用紙を二枚三枚と帖り足して差支へない。

淨法界身 本無出沒 大悲願力 示現去來

仰願照臨 俯請眞慈

大日本國何々縣何々州何々郡何々村何々山何々寺住持遺教比丘某甲

今月十五日恭值

本師釋迦牟尼如來大和尚入般涅槃之辰

虔備香華燈燭茶菓湯珍饈以伸最後慇懃供養

仍集現前比丘衆諷誦

大佛頂萬行首楞嚴陀羅尼所集殊勳

上酬慈蔭者

右伏以

常在靈山微月 幽光遠輝

泥洹雙樹殘華 餘薰尙郁

涅槃常樂之接化迄于今時

無爲實相之德用被于來際

是以

上乘一心之法供養 面々捧五十二類之供具

萬行首楞之祕密咒 各々作異口同音之佛事

伏願

法界徧驚無量聲光之告

群類悉預如來常在之化 謹疏

本師如來 哀愍納受 維時何年二月十五日何々山何々寺住持遺教比丘某甲謹疏

先づ斯の如きの次第である。

九、可漏の事

疏文の内容は以上でよいが、疏には必ず可漏と云ふものが附く。可漏とは疏文を包む封皮の事である。可漏は長一尺五寸とあるが、これも糊入なり奉書なりを竪に折つて三寸五分程の巾にしたるものである。早く申せば上下の口を貼らない大きな封筒を作るのであるが、普通の封筒なれば裏面で貼り合せるのである處を可漏の場合は反對に表面で合縫するとある。そこで之を竪に三つ折に折目を附けて、三分一の上方向別の色紙を重ね貼る。色は主に黄色を用ひるが、物に依つて淡墨色を用ひるものもある。出來上つたならば表面に次の如く書くのである。

三佛會 三寸六分	
恭敬 (黄紙) 疏上 降誕 如來	何山何寺住持遺教比丘某謹封

一尺五寸

三佛會共同じ、但し涅槃會は「涅槃如來」、成道會は「成道如來」と認む

二祖忌

恭敬 (黄紙) 疏上 祖師 炳鑑	何山何寺住持法孫比丘某謹封
------------------------------	---------------

開山忌

恭敬 (黄紙) 疏上 開祖 炳鑑	何山何寺守塔比丘某謹封
------------------------------	-------------

右様の用意が出來上つたならば之に三寶印を押捺するのである。押すべき箇所は本文の大日本國と右伏以と最初の謹疏の三箇所と定められてある。そして可漏には上分黄紙の正中へ押すことになつて居る。

十、僉疏式

大叢林に在つては僉疏式と申して、凡て御正忌當日の前の日の午後に維那和尚が豫め認め置いた疏を方丈に持参して住持の僉書を請ふと云ふ法式である。僉と云ふのは住持がその住所名號を自書することであるから、認書の砌に本文の大日本國乃至比丘某迄と、終りの遺教比丘（又は法孫比丘）某謹疏と云ふ處と、可漏の全文とを書かずに残して置くのである。その式は、維那齋罷に疏を盆に載せ袱紗を掛け、別に香爐香盒を揃へて行者に持たせて方丈に上り、觸禮一拜（坐具を展べず疊んだ儘下に置いて拜するを觸禮と云ふ）して、

「來日何々の辰に遇ふ、請ふ和尚僉疏」といふのである。この時侍者が筆硯及三寶印、印肉を卓上に調へて住持の前に出す、と住持は筆を取つて維那の豫て書き残した部分を記入し三寶印を捺して維那に渡す、維那之を受けて問訊（合掌低頭するを問訊と云ふ）して退き、直ちに知殿に命じて之を佛前の卓上に安ぜしむるのである。

佛前卓上に安ずると云つても唯放りばなししておくのでは無い。可漏を盛るべき道具、即ち無地の位牌のやうな物があるから之に挿んで立て、置くのである。その位置は前卓の中央より少し左に寄せて即ち西寄りに置くのである。どちらへ置いてもよいやうなものであるが、これが古

來の法式であるのみならず、宣讀の際住持は胡跪して柄爐を擎げて居るのであるから、預め其の柄爐と小香合とを準備して之を前卓の右方へ置くのである。それで可漏は勢ひ左方へ置くべき次第となる。疏の取り方、宣讀の仕方等は追つて詳述するから今は略しておく。

十一、二祖忌回向文

さて爾來疏文の事にのみ没頭した有様になつて仕舞つたが、佛祖諷經でも普通には宣疏の無いのが例である。そこで宣疏のあつた時には諷經の後の回向は略式でよいのであるが、これ無き場合は略回向ではよくない。三佛會に於ける回向は前に示したからよいが、二祖忌以下のそれも茲に記載する必要があると思ふ。

二祖忌回向

淨法界の身、本と出沒無し。大悲の願力去來を示現す。仰ぎ冀くは眞慈、俯して照鑑を

垂れ玉へ。

山門斯の辰に遇ふ毎に、虔^{つしん}で香華燈燭湯菓茶珍饈^{とうかぢちんしゅう}を備へ（逮夜の時は「蜜湯を備へ」）謹んで比丘衆を集めて何經を諷誦す、集むる所の殊勳は震丹初祖圓覺大師菩提達磨大和尚（又は高祖佛性傳東國師承陽大師）の爲にし奉り、上慈蔭^{かみじおん}に酬^{むか}いんことを。伏して願くは、悲心^{ひしん}を捨てず三界六凡の衆^{しゆ}を愍み、末世^{まうせ}に再來して一華五葉^{いつげごう}の春^{はる}を現じ、後昆^{こうこん}を覆蔭^{ふくいん}して祖風永く扇^{あふ}がんことを。

第五章 開山忌其他の法會

一、各寺の開山忌

序^{ついで}と申しては甚だ相濟まんが、一般寺院の開山忌をも佛祖諷經中に加へて其の疏^{しよ}をも披露して置きたいと思ふ。尤も地方の寺院で年々開山忌を營む^{むか}向^{むか}は、相當の望利でない限り多く無い状態である。又假りに之を營辨する道心家が有るとしても、小數の組寺や法類位が集つたのでは、出班焼香の修行などは思ひも寄らぬ事である。勿論法式進退に迂遠^{うげん}である小寺住持の集りであるから、行ひたくも出来ないし又誰あつて之を行はうとも思はないで居る。従つて茲にその疏を記載しても詮方ないやうなものであるが、然し從來掲げて來た諸種の疏とても其の通りであるから、たとひ一人で法要を行ふ場合でも道心を喚起^{くわんき}して、之を讀み習ふことをお勤めする。一人でも斯くする者があれば、徳孤ならずで必ず之に隨喜する者が生じて遂には組寺等相寄る場合に法式練習といふやうな眞面目な機運が出来るのである。出来ないから行らないのだ

……と云ふやうな態度では、いつになつても出来るものではない。

各寺開山忌疏

(淨法界の身云以下上慈恩に酬ゆる者也までは是迄のと同じで宜しいが、開山忌に限つて何山何寺守塔比丘某とするのである。)

伏して以れば

法眼圓明にして在世日月の眸を輝かし、

徳宇活達にして觸處霹靂の舌を震ふ。

帝釋の鼻孔を捏轉して梵刹と建立し、兩祖の腑臟を抉出して群機を打成す。

神人歸崇し、檀越子來す。

月に感じて紋を成す靈犀の角に彷彿たり、雷に驚きて華を生ずる香象の牙に依倚たり。

己に門風の繁興を得たり、正に是れ當寺の鼻祖。

遠孫何をか辨ぜん、親奉惟れ勤む。

伏して冀くは、

無底鉢中の齋供、不受食外に容納せんことを 謹んで疏

維時曆年月日 何山何寺守塔比丘 謹んで疏

宣疏しない場合には次の回向文を読むのである。

各寺開山忌回向

(淨法界の身云以下照鑑まで前同様)

山門今今日、伏して 開山某大和尚示寂の辰に値ふて虔んで香華燈燭を備へ以て供養を伸ぶ。謹んで現前の清衆を集めて同音に何經を誦誦す、集むる所の殊勳は上慈恩に酬ひんことを。伏して願くは(以下二祖忌回向と同じ、但し「祖風永扇」の祖風を門風とするのである)

一、尊宿世代及亡僧回向

各寺の開山忌回向斯くの如しであるが、佛祖とは申し得ないかも知れないが、結局當來の佛

祖たる尊宿世代及亡僧の回向を序に記載して置かう。

六四

尊宿世代諷經回向

寶明の空海は死生激湍の波を湛え

大寂空門は今古去來の相を融す。

仰ぎ冀くは眞慈、俯して照鑑を垂れ玉へ。

山門今月來日伏して當寺何世（又は何寺何世）某大和尚示寂の辰に値ふて虔んで香華燈燭を備へ以て供養を伸ぶ。謹んで現前の清衆を集めて同音に何經を諷誦す集むる所の殊勳は品位を増崇せんことを。伏して願くは曇華再び現じ重ねて覺苑の春を開き、慧日長えに明かに永く昏衢の夜を照さんことを。

亡僧諷經回向

一靈の心性本去來無く、幻化の色身生有り滅あり。

仰ぎ冀くは三寶、伏して照鑑を垂れ玉へ。

山門今月來日伏して某上座正忌の辰に値ふて虔んで香華燈燭茶菓湯珍膳を備へ何經を諷誦す集むる所の功德は覺靈を資助し報地を莊嚴す。伏して願くは眞空自ら悟つて早く人間生死の根塵を脱し、心地圓明にして速かに如來寶明の空海に入らんことを。

尊宿世代及亡僧諷經には一體何經を讀むべきかに就ては無論一定の極りは無い。乃ち住持の意樂で何經を用ひても差支は無いが、然し尊宿世代には參同契寶鏡三昧とか、證道歌など云ふ支那撰述の訓讀物を用ひる向が多いやうである。法華經中の神力品や壽量品の訓讀を用ひる向もあるが、觀音普門品、金剛經などを讀んでもよいのである。又亡僧諷經には今日多く修證義などが讀まれるやうであるが、これ亦住持の意樂に従つて何を讀んでも一向差支へないのである。

三、亡僧とは何か

六五

一體亡僧と一口ひとくちに云ふが、僧侶分限上、どの程度迄が亡僧として取扱はれるのかと云ふ問題が起る譯であるが、一般に云へば亡僧とは上座又は座元の格で、年の頃なら十五六から二十前後迄の者が修行中不幸夭折したもの、稱呼である。既に傳法以上となれば和尚りきしやう即ち力生の位置であるから最早前住の位で不幸死亡しても單なる亡僧ではない。又尼衆は所屬堂菴の住持となれば勢ひ其の世代であるから、法階は尼首座でも亡僧の扱ひは受けない。況んや尼和尚の補任を受けて女人乍らも力生の位に在る者は假令若死しても亡僧などと申しては甚だ恐れ入る譯である。

第六章 兩祖降誕會

一、その法要

佛祖諷經中古規には無い事であるが、明治時代から始められて現今益々盛んに行はれて居る法要に兩祖かうたんえの降誕會がある。これは佛誕生會に準すべきもので、いやしくも宗門の兒孫として忘れてならぬ事であるから、「行持軌範」にも追加として記載されてある。

佛誕生會に準すべき兩祖降誕會とあるから、其の慶讚法會としては矢張出班燒香を行するのが正當のやうにも思はれるが、何しろ近年始まつた法會でもあり又これは法式そのものよりも寧ろ之に附隨する種々の催ふしに力を入れられて居る關係から、法式としては割合簡單に済まされて居る感がある。簡單と云つても軌範の教へる通りに行ふには随分鄭重ていちょうにもなるのであるが、要するに一般寺院で行ふには普通の献茶湯で住持拈香法語、安樂行品達行わんぎやうと云ふ程度でよいと思ふ。但し特に注意すべきは高祖の時は太祖を、太祖の時には高祖を光伴くわんぱんに奉請する事である。

ある。光伴に奉請する場合には其の眞牌しんぱいを豫め奉安して置茶湯ちやとうを献じて置くのであるが、その献備は凡て御主牌ごしゅぱいのそれと同一であることが必要である。云ひ換へれば壇上にお並びなされた兩祖の眞牌に賓主同様の御供養を献備すると云ふ事になるのである。尤も各大本山で兩祖の御忌を各別に修行する際にも此の光伴法が行はれて居るので必ず降誕會のみに限つた事ではない。然し僻陬へきそうの小院では献茶湯其の他の器具からして揃へるといふ事は中々困難であるから、光伴の法は實は大本山か他の大叢林でなければ結局出来ない相談になるが、唯その心で行れば一組の献茶湯でも兩組は嘉納して下さる事と信ずる。處で兩祖眞牌の奉安は何れの場合でも高祖を右に太祖を左にすべきでこの順を亂してはならぬ。無論上下を附する意味では絶対無いのであるが、一佛兩祖の尊像でも兩山御紋章の並べ方でも屹度この順になつて居る慣例だからお互も之に準じて心すべきである。

一、兩祖降誕會回向

さて遶行たうぎやう諷經終れば次の回向を唱へるのであるが、回向の文句は何れも千變一律で、改めて記載する程にもない位であるが、兎も角軌範に定めてあるから此に掲げて置く。處で遶行の事であるが、これは十人二十人と揃つた時でないといふ出来ぬ。無理にやれば幾人でも出来るには相違ないが、少數では實に間が抜けて却つて醜體に陥るから寧ろ嚴肅に立讀するに如くはないのである。

淨法界身 本無もと出沒しゆつ 大悲願力 示し現去來げんきよらい

仰冀ぎやう眞慈しんじ 俯垂ふてい照鑑しやうかん

山門さんもん今月今日こんげつこんじつ虔備けんぱい香華燈燭湯茶菓珍饈かうげとうしゆたうぢやくわじん謹集きんじふ合山比丘衆がうざんひしゆくしゆ旋遶せんたう看讀くんでく妙法蓮華經安樂めうほつれんげきやんらく

行品ぎやうひん所集しよじふ殊勳しゆくん

高祖佛性傳東國師承陽大師降誕之令辰、懇請こんしん光くわう伴ぱん
 大祖弘德圓明國師常濟大師、以齊いしやう奉ほう供養くうやう、上酬じやうしゆ慈恩じいん、伏惟ふくし不捨ふしや悲心ひしん、愍み三界六凡之衆、降誕かうたん濁世じやくせ、現げん一華五葉之春、仰冀ぎやう覆ふく蔭いん、後昆こうこん祖風永扇そふうえいせん

高祖降誕の聖日は一月二十六日、太祖のそれは十一月二十一日であることは今更申す迄もない。太祖降誕會は凡て高祖のそれに準じて全然同様に修行すれば夫れでよい。仍つて別に重説の要は無いと思ふ。

第七章 佛祖諷經一般心得

從來述べ來つた所で佛祖諷經の要を悉した事と思ふが、要するにその大體を呑み込んで巨細の點は其時々々の事情に應じて繁簡その宜しきを得るやう心掛ければよいのである。然し如何に簡略にすると云つても、苟も佛祖諷經であるからには、それが假令和尚と小僧とで行ふ場合でも、次の條件だけは忘れてはならない。

第一 導師上殿、北面のまゝ深く揖するとき、兩班大衆共に揖すること。

導師進前上香問訊の時、手磬を打ち出して、歸位して坐具を展ぶるを俟つて三拜手磬を打つ。一衆皆坐具を展べて同時に三拜する。普同三拜である。佛祖諷經の場合には必ずこの普同三拜で始まる。諷經終つた時も散堂に先だつて必ず普同三拜するのである。

第二 お經は何を讀むにしても必ず立讀すること。立讀には坐具を收めて左の衣袖下に懸けるのであるから、入堂三拜の際坐具を收める。而して衆僧の員數に依つては遠行を

行ふをよしとする。

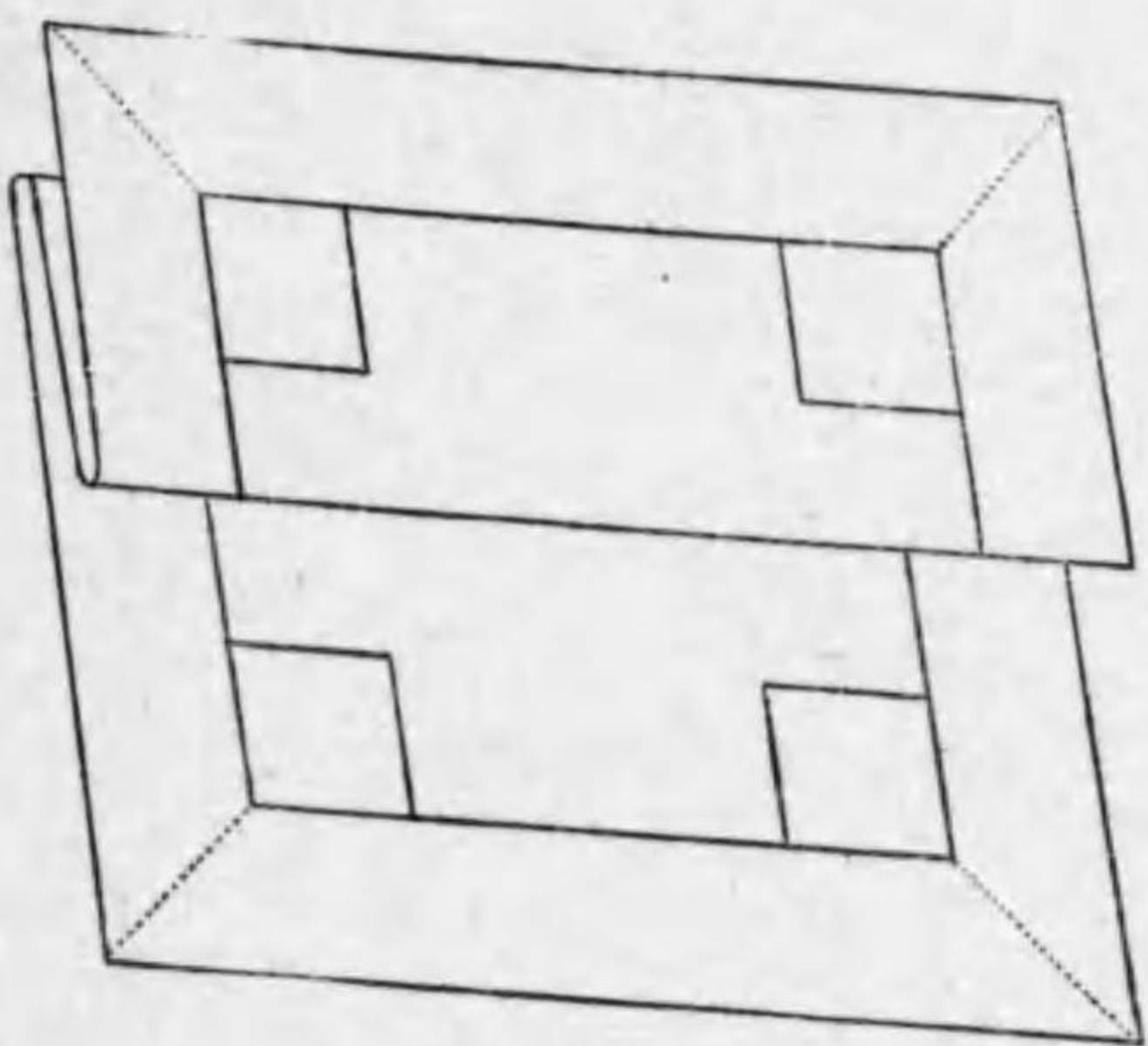
七二

第三 回向の時導師は坐具を展べてゆるく三拜、御名號ごみょうごうに至つて深く第三拜を投ずること

第四 坐具を展收する時は上身だけを少し右方向に向けること。又坐具は圖の如く展べること（坐具を收めて左手に懸ける時は折目の多く出て居る方を外へ出す。坐具を展べずのびに坐作する時は之を四つ折にし折目を外に向けて前に置く。觸禮拜そくらいはいの時も同様。）

第五 遶行わうぎやうの時堂行どうぎやうが止め引磬ひんぎんを打つには、導師が本位に近づいた頃を見計ふこと。

要するに坐讀は檀徒の法事、日課諷經又は特に坐讀を要する場合に限る。又大施餓鬼授戒の供養等の外は檀徒回向に立讀又は遶行の必要はないのである。これは餘事乍ら序に記した譯である。



導師の進退は一に唯めい聲せいに従つて行くのであるが他面から云へば導師の進退に依つて鳴磬する事になるので、一衆の進退も之に従つて規定される譯になる。導師と云ふ言葉は斯んな處から起つたのであらう。従つて鳴磬係り即ち堂行どうぎやうたるものは一に導師の進退を見て打磬しなければならぬのはあるが、總じて鳴り物の事は別に稿を改めて詳説することに致さう。

七三

第八章 出班焼香

一、緒言

二祖三佛忌には本来なら出班焼香しゅつぱんせうかうが付きものとなつて居るのみならず、各寺の開山忌等にも出来るなら之を行ふて差支へないのであるから、機會だにあらばお互ひ申合せて之を行ひ、謂はゆる法式練習の實を擧げたいものである。歎佛とか羅漢講式とか云ふ特殊の法式は年中行ふべきものでもなく、且つ又僧堂の専門家に委せて置いても宜しいか知れないが、出焼班香ぐらゐはお互各頭が大體呑み込んで置かねば困ると思ふのである。然しこの法式は頗る莊重森嚴である代りに、式衆の員數も相當なくてはならず、又相當心得ある者の指導を受けないと仲々行じられないのである。

二、出班焼香の員數

先づ式衆の員數に就て云ふならば、兩班即ち山門の兩序が最少限度で六人、侍者侍香、知殿一人、殿行二人、堂行二人、外に行者ちんじやなど導師の外に十四五人は居なくてはならない。兩班六人と云へば東が副寺、典座、維那、西序が首座、書記、知客しきやくとなるのであるが、この三人兩班の出班焼香と云ふ場合は先づ以て無い。大概五人兩班即ち兩序合せて十人位は居なくてはならない。本来兩序は六知事、六頭首と云ふから、合せて十二人でなければならぬ。知事とは都寺、監寺、副寺、維那、典座、直歲しちさいの六人即ち山門の役寮である。各地一般の本寺株の大寺で「三役寮」などと云ひ慣らして居るのは、右の中の副寺、維那、典座の三人を指すのである。六頭首とは首座、書記、知藏、知客、知浴、知殿の六人で、これは一般に半知事と云はれて居る。即ち準役寮である。半知事は尙此の外にも二三在るが、今は役寮の講釋でもあるまいから他の方面での詳説に譲るとしよう。

三、兩班の稱呼

兩班のことは右の如くで解つたと思ふが、各地の寺院で住持又は尊宿遷化の場合とか、晋山上堂の場合などの兩班配當に何々方丈、何々方丈と書いてあるのを見る。これは無論隣峰の住持尊宿を屈請しての事であるから、敬稱の意味で左様に書くのであらうが、實は甚だ宜しくないのである。日頃の御附合は隣峰の尊宿として十分の尊敬を拂ふに何の不思議もあるまいが、法會に際して配役する場合は法會そのものの當役であつて、既に隣峰の尊宿たる資格ではない。云ひ換へれば、一身の資格ではない。即ち、一身の資格を脱出したる山門の兩序に過ぎないのだから、何々方丈ではなく何々力生又は某甲典座、某乙維那と稱すべきが正當である。斯くては一見その人を見上げたやうであるが、法の上から云へば斯くするが叢林の正規であり又法に親切な所以であると思ふ。然し兩祖の古規に闇かりし時代の遺風が其儘今日に及んで居るので、徒に人を重んじて法を輕んずるとも氣附かずに誰しも平氣でやつて居るのだから致し方が

無いが、習ひ性となつた古老や中老は兎も角も、若い連中は除々に申し合せて改正すべき事だと思ひ、敢て憎まれ口を叩く次第である。

話が脇路へそれて恐れ入るから本題に引き戻すとして、兩班の外に知殿堂行殿行が若干名、侍者侍香二名、其他の行者若干名が必要となる。侍者は本式に申せば五侍者即ち燒香、衣鉢、書狀、湯藥、請客の五人あるべきで、出班燒香の時には燒香、請客の二侍者が附くべきであるが、晋山上堂の時以外には五侍者揃つて出る場合は少いから、平素は單に侍者と侍香で間に合せるのである。

四、出班燒香の諸準備

所要員數は最少限乍ら先づ右様でよいとして、次は法堂の諸準備である。法堂と云ひ慣らして居るが普通本堂の事である。大山大寺には本堂の外に佛殿がある。佛殿は其寺の御本尊を安置して朝夕の課誦を勤行する場所で、本堂は法式を演布する場所である。然るに各地の小院と

しては本堂以外に佛殿まであるものは先づ無いと云つてよい。従つて本堂が佛殿でもあり又法堂でもあるので、法堂と云へば直ちに本堂の事と合點してよい。

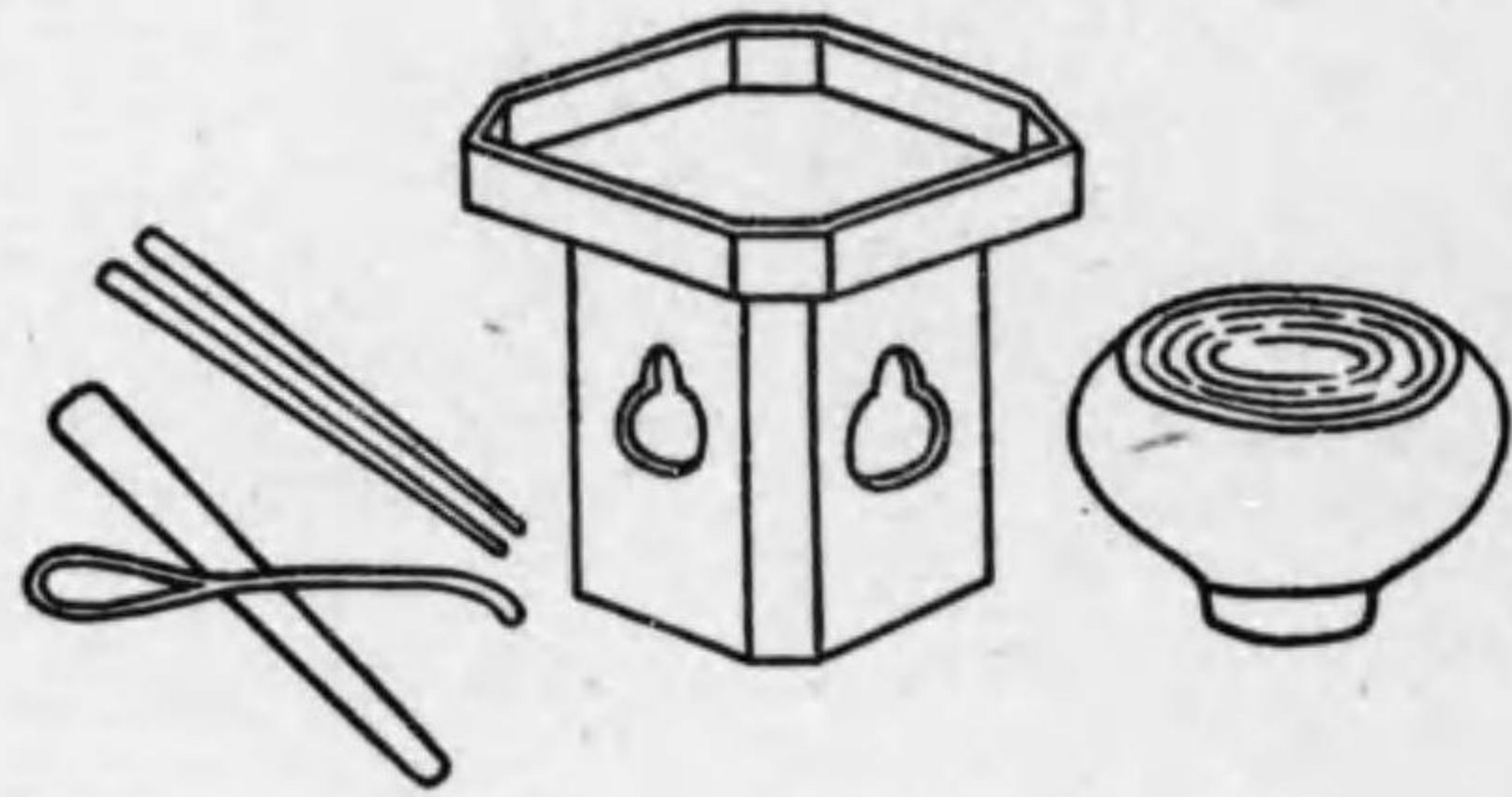


五具足

法堂の準備としては香華燈燭の設備は先づ尋常でよいが、其寺相應の莊嚴鄭重を極めて前卓即ち前机（須彌壇前の大卓）に柄爐へいろと小香合及前に述べた疏しよを大香爐の左右に安するのである。一體前卓には平素五具足が置いてある筈だ。即ち花瓶一對、燭臺一對、香爐一箇都合五つ、即ち五具足である。中には三具足——華燭爐だけの寺もあるが、大抵五具足で、花瓶には金蓮の常花が挿してあると云ふのが普通である。此の五具足は勿論其儘にして別に右の品々を揃へるのである。

次に須彌壇の東西即ち内陣の兩側に鳴鉞位めいげつゐとあるから二對の鏡鉞やうげつを伏せて鉞位げつゐを設けるのである。次に内陣の東側に高卓を据えて湯ゆ、食じき、嚙金しんきん、

菓茶くわちやの供具を辨備する。湯は普通の茶湯器に盛つたのでよいが、食じきと云ふのは佛餉用ぶつかうようの應量器に



佛餉器

御飯ごひんを盛つて匙しを附けるのである。佛餉器は朱塗で出來て居るもので、僧堂行鉢そうだうぎょうはちに要する匙筋しきん等が附屬して居るが衆僧の用ひるものより一段と小型に出來て居る。普通の法要には飯いひ汁じゆ其他の諸料理を盛つて謂はゆる珍饈ちんしやくを附屬の三寶上に並べるのであるが、此の時に限つて御飯だけを三寶の中央に据えておくのである。嚙金しんきんは謂はゆる三つ折りで、寺院お互の吉凶事に持參する可漏かろう（疏文の可漏とは違ふ）即ち糊入のりいれ又は奉書ほうしよを堅かたに二つに折りそれを横に三つに折つて、謹上何々、金何圓、何寺某甲九拜と三處に認め折つた表面に「上」の字を書くのであるが、此の時の可漏は白紙の儘で中に多少の金錢を入れて置くのである。次に菓茶は最初の湯器と合せて普通の

の献茶湯と同じことになるので菓子かしは矢張三つ菓子かしでよ。

五、導師上殿

以上の準備を調へ時至つて知殿殿行に命じて殿鐘を打たしむること三會、一衆上殿常の如く兩序も班立する。殿鐘止み七下鐘に従つて住持上殿、一衆低頭問訊すること一般の法要に等しい。殿鐘三會終らんとする時堂行引磬を持つて方丈に上り觸禮一拜して住持を請し、先導して八尺間に到る間に鳴磬七下すると、殿行其の音に應じて殿鐘を打つこと都合七聲、これを七下鐘と云ふのである。殿鐘第三會に住持上殿の場合にはこの七下鐘は不用であるが、大法要には七下鐘を用ひた方が鄭重でよいのである。

六、傳供の法式

1、大展湯食三拜

住持一衆の問訊に對して正面に和南し直ちに進前焼香する。侍者侍香は前者を請客侍者に後者を焼香侍者に擬して、請客は知事位の背後から、焼香は頭首位の背後から共に前卓の左右に到る。即ち請客は前卓の東に焼香はその西に互に向き合つて立つのである。此の時殿行兩名自位を離れて一は東に一は西に兩侍者の背後に立つ。住持焼香退位して大展三拜する。大展と云ふのは坐具を折らずに敷く事である。三拜了つて坐具を其儘にして進前焼香する。此の時東序の殿行は豫て用意の湯器を取つて兩手に高く捧げて之を請客侍者に渡與する。この擎器の法は



實地に就かなければ克く解らないが、大要まづ圖のやうに持つのである。

即ち左手の全指で器の底部を確と持ち右手を立てるやうにして器の中頃を支へるのである。相向つて傳達するのだから皆同一の持ち方で手と手の衝突は無い事になる。又茶と湯とは蓋がしてあるから殿行は之を請客侍者に渡す時、その受け取るのを待つて蓋を取るのである。即ち右手を覆ふて蓋のツマミを大指と中指との間に挟んで取り、其儘送り問訊するのである。

侍者が殿行から受け取る時には右に身を轉じ、受取つて殿行の送り問訊の濟むのを待つて左に轉身して之を住持に渡すのである。住持は豫め迎へ問訊して之を待つのであるが、この問訊と殿行の送り問訊と同時になるやうにせねばならぬ。住持は之を受け香に薰じて焼香侍者に渡すのであるが住持の擎器は必ずしも他の者の如く餘り固くなつては却て之に差支へる場合もあるのである。つまり薰香等の作法があるから他の者の如く餘り固くなつては却て之に差支へる場合もあるのである。勿論笏とか拂子ほらすの如き持ち物は一時前卓又は香台に置いて兩手を明けて置くべきであるが、何にしても固くならない事が肝要である。住持から渡される前に焼香侍者は豫て迎へ問訊するのであるが、これも請客侍者の送り問訊と同時になければいけない。住持の送り問訊と同時に西序の殿行は迎へ問訊して焼香侍者から渡されるのを待つ。斯くして西序の殿行は自身壇上に安するなり、又知殿が預め壇上に居て殿行から受け取るなり、これは須彌壇の廣狹、員數の多少に依つて便宜に取計ればよい。轉身の法は東序西序共に必ず須彌壇に向いて轉身すべきで、東序は先づ右に次で左に、西序は先づ左に次に右に轉身すればよいのである。又湯器茶器の蓋ふたを取る時に、左手を仰向けにしてツマミを指間に挟み蓋の裏面を外向けにして問訊する者

もあるが、これは合掌するに都合はよいけれども非法でもあり又餘りに派手カチカチであるから、矢張法に従つて手を覆ふて取るのがよいのである。

次に食器を傳供するのであるが、その法式は湯器と全く同一にするのである。湯と食とを壇上に供し畢るを見て住持位に歸つて三拜する。之を湯食三拜と云ふ。

2、観金菓茶三拜

三拜了つて又進前焼香、観金くわんきんと菓子とを傳供するのであるがこれも湯食と同様にするのである。供し畢れば住持歸位三拜、即ち観金菓茶三拜である。この時他の殿行が法堂鼓ほつどうこを打つこと一會する。即ち茶鼓さこで、茶鼓の打ち切りを待つて又東序の殿行から茶器を傳供する。傳供了つて住持三拜、即ち茶三拜である。然し軌範には観金菓茶三拜とあつて従つて茶鼓を打つ事も記してないから、茶三拜を別にするのは世間の慣習法で實は非法であるのであらう。住持の拜數から見ても、最初の大展三拜、湯食三拜、観金菓茶三拜で都合九拜となるから、茶三拜は無くてもよい筈である。出班焼香は導師十八拜と昔から云ひ慣してあるが、これは栴樹林指南記にある

兩班傳供から來た説で、燒香三拜を皮切りに「上湯上食上菓上茶上嘸其都度三拜するを傳供十
八拜と云ふ」云々と記されてあるのを其儘に吞込んだに過ぎないのである。又現在行はれて居
る法として、嘸金菓三拜の次に中揖三拜を加へ、更に茶鼓を鳴らして茶三拜、これに入堂三拜
を加へて強いて十八拜を行じて居る向きが多いが、これも悪くは無いが清規から見ても如何とも
思はれる。茶鼓もよいが静まり切つた上供中に突然之を打つて一衆を驚かす如きは、法式進行
の肅靜を減殺する感じもあつて、面白くないのである。依て之は斷然廢止して軌範に遵ふべき
であると思ふ。

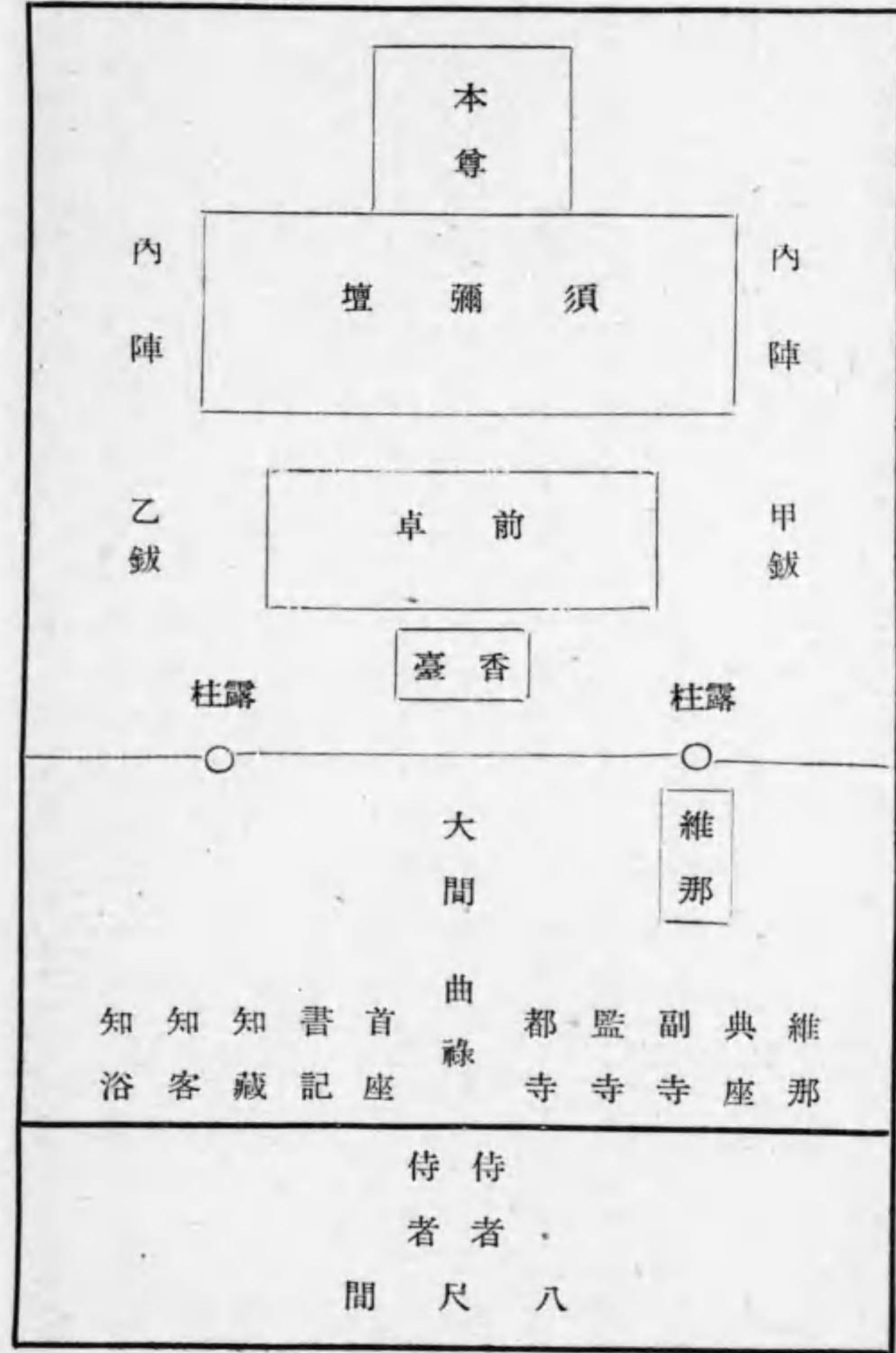
七、兩班開列

上供終つて後住持の三拜も終り、坐具を收むるを見て請客侍者大香（太官香と稱する長い線
香、普通には大薰香ぐらゐで間に合せる）に點火し、燒香侍者と兩殿行と四人同時に相揖して
位に歸り、請客侍者は大香を住持に呈す、と住持拈香法語、進前挿香歸位した時、兩序相揖し

て末位から班を引いて東西に分れて一列に並んで北面する。殿行は豫め曲祿を用意して八尺間
に置き兩班列立の中央へ出すと住持退いて之に倚るのである。

八、維那檢爐

此の時殿行兩名自位を離れて内陣の鉞位に就く、東を甲鉞とし西を乙鉞とする。殿行は甲乙
同時に鉞を取つて之を抱持し、甲鉞だけ軽く鉞唇を捺すること三下即ちカチツ、と三聲す
るのである。維那はこの鉞聲を聞いて自位を離れて卓前に進む。維那の位置は東序の末位とす
るので、この際に限つて前掲六知事の順位には依らないのである。維那は卓前に進んで香爐の
火を點檢する。此の香爐は五具足中それでは無く、燒香用として別に用意されたもので一般
に箱型の手香爐が用ひられる。香臺と稱して金欄の覆沙を掛けた住持専用の香爐もあるが、こ
れは住持の専用で餘の者が使用すべきではない。維那爐火の消えて居ない事を檢し終つて退い
て東序の露柱を背にし南面して立つ。大間は既にガラ明きとなつて居て、拜席も坐褥も兩班分



列の際殿行に依つて手早く片附けられて居るから、一列に北面して居る兩班の前には維那和尚が只獨り立つて居るだけで何物も存在しない。大衆は勿論大間の外に堵列して居るのである。解り易いやうに圖示すれば前頁の如くなる。

九、維那揖請

維那が爐火を檢して退き露柱前に立つた時甲鉞又鉞唇を捺すること三下する、と維那は前進三步して住持を揖請する。此の時維那は右足を扇形に蹈んで三步進み、坐具を取つて大間訊の形を取る習慣があるが、只揖請するとあるのだから問訊の形を取るの是非であらう。住持は答揖し維那は却歩して露柱に背した時に甲乙の兩鉞を同時にヂヤランと鳴らす、と住持は位を立てて進前焼香歸位する。鳴鉞は五聲であつて、一聲離位、二聲進前、三聲焼香、四聲退歩、五聲歸位となるのである。進前退歩共に大間の中央に來た處で鳴らすやうにする。次に又甲鉞の鉞唇を鳴らすこと二下すると、維那又前進一步して兩班の上位を揖請する。上位の兩名即ち都

寺と首座と齊しく答揖し、維那の歸位するに隨ひ鳴鉞につれて進前燒香退位する。兩班は歸位の際、大間の中央まで來た時に揃つて住持に問訊する。その時第四鉞を鳴らす習慣になつて居る。

斯くして順次に兩序を揖請して兩序次第に進前燒香し最後に維那西序の末班を揖請して一旦露柱に歸り、末班が進んで中央に到らんとする時維那も進んで中央に到り末班と共に進前燒香して其儘共に本位に歸るのである。

十、大衆九拜

維那本位に歸ると同時に大聲に「大衆九拜」と喝する、と堂行は手磬を一通する間に兩班も大衆も一同坐具を展べ堂行の大磬一打に従つて投拜する。堂行は一衆の五體投地を見て大磬を押へ、その立つを待つて又打磬して第二拜、第三拜順次進んで第九拜に至つた時に打磬二聲して九拜の終了を知らせるのである。一衆坐具を收むるを見て手磬二聲、兩序の上首が班を引い

て本位に歸り兩序對立し、大間外の大衆も進んで兩序の背後に就く。大衆九拜の時住持は獨り曲祿きょくろくに倚つた儘で九拜の仲間に加はらない。

十一、兩序燒香の仕方

兩序の進前燒香に就いても、東序の者は左手で、西序の者は右手で香を拈じ、共に佛前に向つて爐中に燒き齊しく合掌問訊して、共に内に向つて轉身歸位するのである。一は内に轉身し他は外に向いて爲すが如き醜體を演じては困る。又又手出班、合掌歸位と云ふのが法堂進退の常法であるから、此の時も矢張りその通りに行すべきである。歸位の時中央で住持に問訊する法は軌範には明記して無いが、從來の習慣上之を借香問訊と稱して矢張行はれて居るのである。

十二、住持胡跪、維那宣疏

兩序大衆各々其位に止定するを見て住持は曲膝を下り進んで中央の位に就く。殿行は前以て手早く拜席坐褥を敷いて住持の位を設ける。此の時維那自位を離れ進前焼香して豫て前卓上の左方に立ててある疏を取り香に薫じ横拈して歸位する。住持は大展して具上に胡跪する。(右



の膝を下に着け左の膝を屹立し臂を舉げて端身する) 長跪(兩膝を下に着ける)する人もあるが胡跪でなくてはいけない。兩侍者共に卓前に進み焼香侍者は柄爐を取り請客侍者は小香合を取り、共に之を擎げて内に身を轉じ前者は住持の右から後者はその左から、相向つて跪き齊しく之を住持に遞進する。住持は先づ柄爐を取り、次に小香合を取つて爐蓋に安じて香を焼き兩掌に挟み擎げて佛顔を瞻仰する。兩侍者は合掌轉身して前卓の東西に歸り相對して侍立する。此の時維那宣疏を始めるのであるが、宣疏の法は疏を豎に持ち直

し、可漏を三つ折りにして、疏の突き出たまま、黄紙の部分を外に向けて胸間の衣下に狭み靜かに疏を抜き取り雙手に之を開いて全面展開し、その首尾を持ち捧げて徐ろに宣讀するのである。

宣讀即ち讀み方の説明は録音でもなければ完全に出来る事ではないが、大體を申して見れば、先づ初めの歎偈四句「淨法界身云云」と仰冀の二句は小聲で讀み、大日本から今月今日に至つて段々に聲を大きくし、右伏惟以下朗聲に、謹疏を聲を引いて大聲に宣べ、最後割り書から比丘某甲まで小聲、最終の謹疏は最も高く又長く「つーしんでーしように」と云ふ様に聲を引くのである。一體この宣讀ばかりで無く凡て聲を使ふ役割は一に先天的の美音に俟つ所多いもので、何れの地方にも其の適任者が一二存在するものであるが、然し假令生れ付き惡聲の者でも努力練習すれば相當の域に進む事も出来るので、要は人に聞かせると云ふ態度でなく、佛祖の照鑑を仰ぐと云ふ固い信念から發聲すれば、自然と莊重に聞えて有難味も出て來るものである。いつも云ふ通り法式は信仰の具體化であることを始終念頭に置いて行はなければ、折角の行持も猿芝居に等しい事になつてしまふ恐れがある。

十三、舉經と遶行

さて維那宣疏の終りが近づいて維時何年何月何日まで進んだ頃に、兩侍者は從歩して住持の左右に到り共に跪いて、柄爐と香盒を承け身を轉じて立ち前卓上の元處に安じて歸位する。此の時住持は坐具を收めて立つのである。維那は疏を巻き收めて可漏に容れ之を横拈して卓前に進み元處に安じて佛前に問訊する、と堂行大磬を打す。維那は歸位して大磬三聲の後、聲を引いて、南無本師釋迦牟尼佛……と聖號を舉し大衆同和すること三返、次に舉經するのである。出班焼香には楞嚴咒を讀むのが法となつてはゐるが、前にも云つた如く、大悲咒で間に合せてもよい。何れにしても遶行する事が必要で立讀では宜しくないとする。遶行の時は、住持舉經の磬聲と共に進前焼香するから、堂行は其の間に小磬又は手磬を七下し、住持本位に戻るを待つて大磬一聲、一衆楯して右に轉身徐々に遶行するのである。遶行の遅速は一に衆僧の多少と大間の廣狹に依るべきであるが、通常疊の幅を二足半に徐歩すると云ふ慣例になつて居る。此

の際一同が特に注意すべきは、相互の間隔を相等しくする事である。これは全員共に注意しなければ駄目であつて、誰も彼も自身と前の者との間隔に氣を附ければ皆揃ふ譯であるが、中に一人でも注意を怠つて空で居る者があると其處は屹度離れ過ぎたり附き過ぎたりする。遶行の支離滅裂になつたもの程見つとも無いものは無く、各頭の道念の程が見え透くやうで折角の信仰心まで打ち壊されるやうな氣がするから、必ず共に注意せねばならない。

十四、回向と散堂

さて讀經終れば維那回向を唱へる。讀經中に殿行は式に依つて回向帖を傳達するのであるが、その進退は又別に詳説することにする。

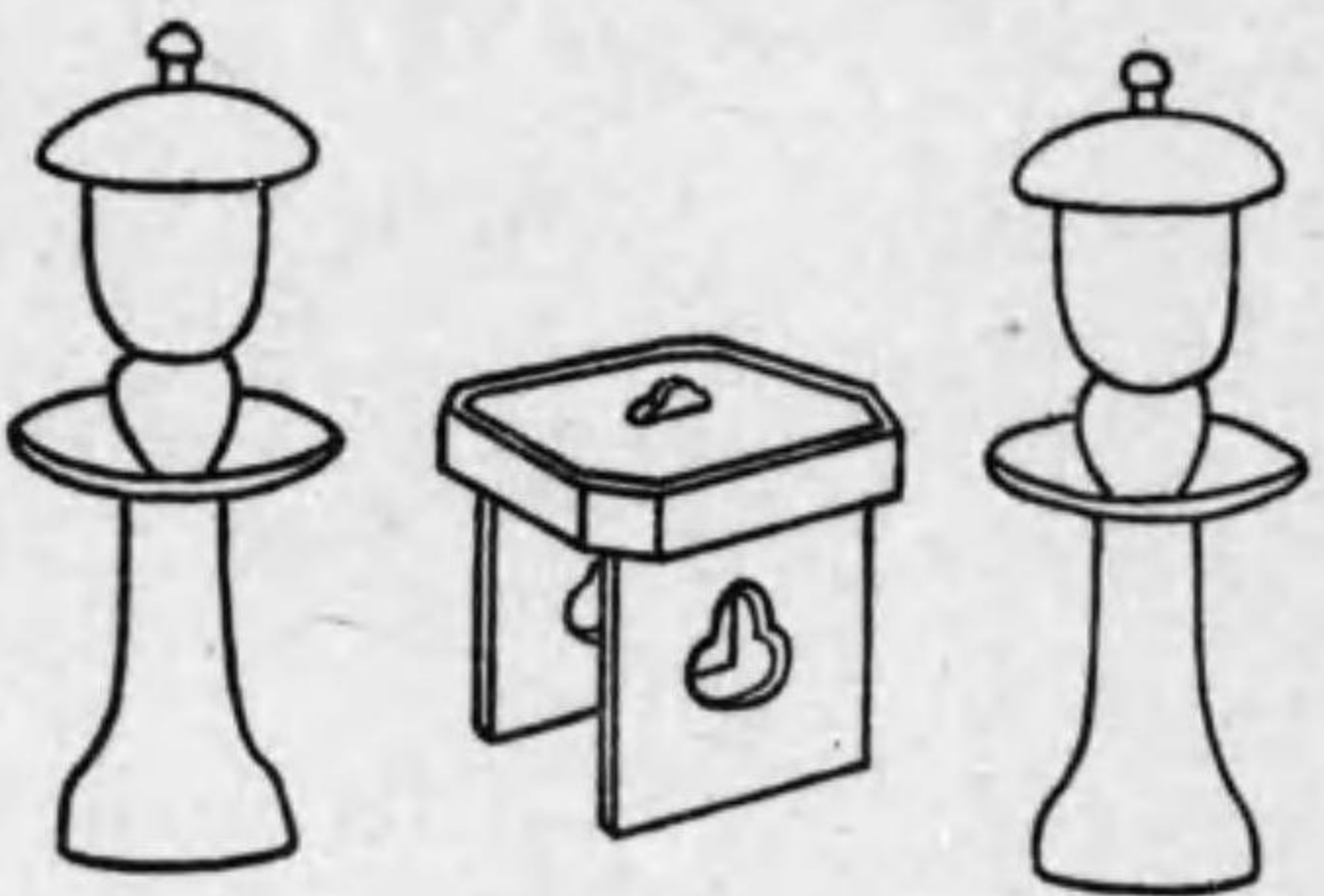
上來諷經する功德は 今日降誕（又は入涅槃或は成道）本師釋迦牟尼如來大和尙に供養して以て法乳の慈恩に酬いんことを。

一衆同音「十方三世」畢つて普同三拜散堂、これで出班焼香が全部終了した譯である。散堂

に際して堂行一名手磬を持つて預め八尺間はつしやうかんに出て住持の退出を伺候し、先導して方丈に送ると其の上殿を迎へる時と同様にする。二侍者も普同回向中に三拜を済ませて香臺を收め先づ八尺間に出て堂行と共に住持を伺候して之に隨伴すること上殿の際に準ずるのである。

第九章 献茶湯式

一、諸菩薩奉齋



器湯茶献

上來述べて來つた三佛會兩祖忌に當つて法の如く出班焼香の出來ない場合が先づ多いとしても、少くとも献茶湯位は是非とも行じたいものである。前顯の佛祖忌以外の佛祖忌と申しては妙に聞えるが、大本山の二代様とか六祖大師、洞山大師乃至は天童如淨禪師等の御忌に當つては殊更之を嚴修すべきであると思ふ。殊に又地方の小院としては觀音講とか地藏講など云ふ諸菩薩又は諸天等の奉齋ほうさいが、佛祖忌以上に多く行はれて居るやうであるから、その特殊な法要を行ふに極つたものは別として矢張り献茶式なりとも嚴修して參拜者等の信仰を増進するやう心すべきであらう。

二、中揖三拜

さて献茶湯式と申しても、前述の出班焼香に於ける傳供式と全然同じであるから、改めて茲に再説する迄も無い。即ち湯食観金茶菓の中から食と観金を除けばあとは湯菓茶となるのであるから、これで其儘献茶湯となる譯である。尤も献茶湯式には前湯後茶と申して午前は湯を先にして午後は茶を先にすると云ふ習慣がある。然し何れにしても茶と菓子と湯との三品を傳供し献備する迄の事で大した面倒は無いのである。只献茶湯の時は住持の中揖三拜が附く。尤もこれは必ず附物つきものと云ふではないが先づ有る方が正當だと思ふ。そこで大要を述べて見るなら、先づ上殿普同三拜、兩班大衆皆坐具を收めて立つ。住持は展具の儘進前焼香、請客、焼香の兩侍者（又は侍者と侍香）は位置を轉換して住持と共に兩序の背後を経て内陣に進み、前卓の東西に相向つて立つ、と東序の殿行から献具てんぐの遞傳ていでんが始まるから、出班焼香の時と同様、轉身傳供、送迎問訊を如法にして、献供畢まひらつて住持歸位三拜、更に進んで中揖ちゆうぎする。中揖とは卓前に

進んで深く問訊して其儘歸位することである。住持の中揖と同時に兩侍者殿行共に問訊歸位するのであるが、その前に殿行は大香に點火して之を焼香侍者に渡す、侍者は歸位の際之を捧持して、住持三拜收具起立するを待つて之を捧呈する。住持は大香を受け取り拈香法語宣しくあつて進前焼香問訊歸位すると堂行打磬、此の時殿行經本ひを行くのであるが、暗誦の經咒には行經の要はないから、維那直ちに舉經こきん、一衆遶行讀誦法の如くにして回同、普同三拜散堂と云ふ事になるのである。

觀音講等で信徒の和讃わんげ歎偈などの志望あれば、一衆散堂の後殿行拜席を收め、一同を大間だいまに坐列させ靜肅如法に之を行はせて然るべしと思ふ。

第十章 疏と回向文の大意

一、緒言

回向文にしても宣讀の疏にしても何れは佛祖の恩徳を讃歎したもので、詳しい譯は解つても解らなくても只々聞いて有り難いと云ふ感じが起れば聽て佛祖の慈悲掛受に預つた事と確信してよいのであるから、強いて之が解釋などを試みるべきでは無いかも知れない。然し昔流の「依らしむべく知らしむべからず」では今日最早通らない事になつてゐる。蓋し俗智の進歩に連れ何事でも一應批判的に扱はねば承知出来ない世の中となつたからである。と申すやうな次第で、回向なり疏文なりの大意を知りたいと云ふ者も随分有る事と思はれるから、淺學の自分としては盲者の垣のぞきであるかも知れないが、解説を試みて茲に蛇足を添へる事に致すが、恐らく間違ひもあらうから先哲の呵責を受ける事と恐縮する。

煩鎖に傾く嫌ひはあらうが、爾來讀み易きやうに伸べ書きにしてあるので、原文の驢體を滅却して居るから改めて原文を掲げる事にする。

一、佛誕生會疏

淨法界身 本無出沒 大悲願力 示現去來

仰願照臨 俯請眞慈

大日本國某府縣某州某市郡某町村某山某寺住持遺教比丘某甲

今月初八日恭值本師釋迦牟尼如來大和尚降誕之辰、虔備香華燈燭茶菓湯珍饈、以伸供養、仍集現前比丘衆、同奉灌浴、誦大佛頂萬行首楞嚴陀羅尼、所集殊勳、上酬慈蔭者。

右伏以、曇華瑞現徧界香氣曼引、赫日質麗滿天光輝普照、三祇却滿之最後身、四八莊嚴之大妙相、是凡是聖悉皆歸仰、天上天下唯我獨尊、三百餘會法雨潤遠浴、二千餘年德風響久扇、仰願毫光益來際而福業利塵沙、伏請心華開滿地而莊嚴敷法界。謹疏。

最初の淨法界身云の四句は之を數偈たがひと稱へて、劈頭先づ以て佛徳を讚へるのである。即ち清淨法界の佛身は元來不生不滅で生死出沒に墮すべきものではないが、清淨法身も何等かの形體を以て此の世に出現しなければ、衆生濟度の本願を遂げることが出来ないから、人間の如來は人間に同する次第で、本願のお力に依つて世に降誕せられ、出家成道說法涅槃と普通凡百の人間と同様に生死去來を示現し玉ふまで、佛身それ自體には何の増減も無いのであると、衆生救濟の願力に依る諸佛出世の靈徳を讚歎したものである。

仰願還臨云は、今法會を嚴修する此の道場に如來大師降臨を願ひ、我等の衷心を慇懃玉ふて茲に捧ぐる微供を受け給ふやうとの意味である。次の今月初八日以後上酬慈蔭者までは普通の散文でもあり又讀んで字の如くであるから別に解釋にも及ぶまい。次の右伏以下が即ち對句の驅體れたいになつて居るので頗る面倒な部分となる。右伏以の三字は接續の語で「傍句」と云つて別に意味は無い。

曇華瑞現して徧界香氣曼引たり、曇華は憂曇華うどんげの事此の華は幾億年に一度と云ふ程容易に咲かぬ花であるが、今は釋尊の出世に譬えて云ふたので容易に咲かぬ憂曇華にも等しき肉身佛の出世降誕に逢ふて靈香三千世界に滿ち瑞氣比するに物なき有様を形容した句である。

赫日質麗く滿天の光輝普く照す、即ち無明の闇を照す佛身の出現は、天日の赫々として昇るにも等しく、物として照破せざるはなき様子を形容して斯く申されたのであらう。質は形體の事で麗は圓滿無缺と云ふ意。

次の二句は更に滿徳の佛身を讚歎して三祇さんぎ即ち三大阿會だにあそうぎ祇劫ぎきょうに亘る長い々々因地の修行を積まれた最後の報身たる我が釋尊は四八——三十二相を備へ玉へる大妙相であられるよ、との意。三祇劫さんぎきょうと云ふのは無量劫と云ふと同じ事で、人智では到底數へ切れない程の長年月を云ふのである。次は釋尊即ち世にも尊き世尊の出現に對して、凡夫も聖人も悉皆歸依瞻仰せんごうし奉り、天上天下唯我獨尊と獅々吼なされたその大圓滿徳を讚歎せざるものなしとの意であり、又次の句は世尊御一代三百餘會の御說法、その法雨の潤ひは印度全國は申すに及ばず支那朝鮮蒙古日本、さては世界の此處彼處と遠き國々にまで及んで、その恩澤に俗する者其の數を知らず、世

尊滅後二千五百餘年の久しきに至つて徳風の響き今尙盛んに扇いで遺教の長えに限りなく傳はる事を表はし、次にさあれこの上の御願としては白毫の御光りは盡未來際に法益を下し玉ひ、福業善根の功德は大千沙界有形無形の魂を利益救済せられて、有情成佛の心華は世界到る處に開發し、七寶の莊嚴もて衆生心内の法界を覆ひ、謂はゆる寂光淨土の實現を成就せんことを祈る次第であるとの意を表現したのである。白毫とは世尊の御額に輝く白毛の美光の事である。意味深長にして配字の妙を極めた原文を、拙い解説に依つて却て下馬す恐れは左こそと思ふのであるが、大意を模索するに幾分の助けとなれば重疊の至りで、其の深遠な妙味は各頭原文に就て味得せられんことを望むのである。

以下何れの疏文も前文は略ぼ同じであるから、右伏以から下の駢體だけに就て大要を伺ふ事と致さう。

三、涅槃會疏

この疏は書き方の参考として前に原文全部を掲載して置いたから、今は直ちに解説に掛る事にする。さて世尊は八十年の人生を以て入涅槃なされたけれども、法華經如來壽量品に説かれてある如く、世尊は永遠に靈鷲山に在しまして常に衆生の爲に説法し玉ひつゝあるのだから之を月になぞらへて常在靈山の微月は幽光遠く輝きと申されたのである。お涅槃の悲調を表はす爲に微月、幽光と云ふ陰氣な文字を用ひられたものと察する。泥洹は涅槃の事で雙樹は沙羅雙樹、矢張悲哀の意味を強調して殘華、餘薰と云ふたのである。涅槃は實に無爲寂靜で、佛子最後の理想境であるから常樂の境界であるが、今世尊御身親しく之を一切群生に示現し玉ふたので、其の御接化は遠く末法の今日に及んで居るのみか、その無爲實相なる理想境實現の大徳機用は盡未來際に加被して極まる所が無いのである。されば現前の清衆同一上乘の法を信受奉行する此の大供養に於て各頭五十二位の佛階を供養の法具とし捧げ參らせ、大佛頂萬行の首楞嚴咒を以て各々異口同音に佛徳を讃へまつりて供養の法會を營み奉る。伏してお願ひする所は、世の有りと有らゆる一切の群類が、世尊入滅の悲報とその最後の御聲に目醒めて、出沒去來の相に亘らざる常在靈山の佛化を蒙つて悉得成佛の妙果に預らんことであると。悟入徹底せる心

境を縦横の文才に托して自在に物せられた韻文であるから、重ねて申す如く原文に就て其の妙趣をよく／＼翫味して頂きたいのである。

四、成道會疏

大圓滿覺 垂_二跡西乾_一 心包_二大虛_一 量周_二沙界_一

仰願_二照鑑_一 俯請_二眞慈_一

大日本國云云

今月初八日恭值乃至上酬慈蔭者 右伏以、融_二瓶盤釵釧_一而爲_二一金_一非_二智火_一鮮_レ克、校_二琴瑟箏篋_一以諧_二六律_一含_二妙手_一奚爲、蓋衆生有_レ具_二如來智慧德相_一若大覺無_レ示_二衆生迷悟_一方便、演若狂性難_レ歇力士額珠永忘、今聞_二大地有情成道_一、新明_二本有佛性之正因_一、慧照永輝一燈傳_二百千燈_一、道風久扇此界洎_二無邊界_一、謹疏

本師如來 哀愍納受 維時曆年十二月初八日何山何寺云云謹疏

最初の歎偈四句の意味は佛成道の功德廣大の様子を現はし讚歎したもので、大圓滿覺とは大覺即ち佛陀を指して圓滿の相好を讚美して云ふた詞である。西乾は西天即ち印度の別名、大覺の佛陀は三十二相八十種好の妙相を以て足跡を西の方天竺の地に印して出現なされ、有情非情同時成道を喝破なされたその心境は正に大虚空無邊際の群類を包含するの意氣を示され、雄大極りなき御量見は大千沙界の凡てを吞却して餘す處なき有様であると、僅々四言四句の十六文字に無限の讚意を包括して居ることを克く々々翫味すべきである。次に驪句の意味であるが、瓶盤とか釵釧とか種々の形體を成した金物を融解して一個の金塊となさんには必ず共に火熱の力を借りなければならぬ。又琴瑟箏篋即ち管絃の樂器に依つて六律六呂の妙曲を校案するにしても人間の指先の働きを豫想して専ら之に頼らなくては何にもならぬのである。されば假令衆生が元々如來の智慧德相即ち本具の佛性を持つて生れたとしても、大覺世尊が之に教ふるに迷悟得失是非善惡を以てしなければ、誰あつて自ら之に心附く者はあるまい。譬へば鏡中に映する自分の姿を見て驚いたと云ふ彼の演若多の如く、又額珠と申して金剛力士の額に附いて居る

寶玉を我乍ら忘却して他に向つて尋ね廻るが如く、迷ひに迷つて收拾すべからざる状態となつてしまふのである。演若多とは其の昔印度に居つた若い女性で、嘗て鏡を見た事も無かつたのに、一朝鏡に向つて其の映つた姿體が爾來見た事の無い人だから、一體あれば誰であらうと人に問ふたら、あれこそ實にお前様自身の姿であると云はれて大に驚き、あれが演若多であるとすれば一體この私は何でせうと反問したと云ふ話がある。金剛力士の額珠もこれと似た話であるが今は衆生が本來具有の佛性に心附かず却て之を他に向つて求むるの愚に譬えたのである。然るに今や世尊の成道に際して、我と大地の有情と同時に成道せりと喝破せられたお言葉を聞いて、斯くも迷路にさまよつた衆生が、本有の佛性にハッと氣付き、悟りを開く正因を得た爲めに、慧日の光も永遠に輝いて煩惱妄想の曇りも拂はれ、世尊お一人のお悟りがその儘後世幾千萬人の悟道となつて傳はれること、恰も一燈を元として百千燈の點く如く、佛道の徳風長く扇いで、單に我が此の娑婆世界ばかりでなく、無量無邊の世界にまでも及ぶことであると、佛成道の歡喜を種々の方面から讃仰せられたのである。

五、達磨忌疏

1、原文と作者

淨法界身云云乃至以酬法乳慈恩者 右伏以慧日西沈鷲嶺一殆一千年、法雲東簇神州越十萬里、於是、白馬始先漢朝之瑞、赤鳥自紹吳會之祥、翻譯虬文、流通經教、章疏之科節星繁、名相之教網雲敷、刁刀相似、魚魯難辨、爰我藝祖少林達磨大師、慈心包於遠裔、教救蒙於遐陬、罔辭巨海之驚濤、荆遊梁土、不契老蕭之丹臆、潛之魏邦、泛一葦於重江、終九年於少室、單傳心印、直示宗綱、席上拈華、飲光之正脉有寄、庭中立雪、慧可之得髓無疑、法雷既震於九州、道風遂扇於四海、然屆隻履西歸之日、敢忘攝齋北面之勤、今仰深重之尊徳、遙伸如在之誠禮、覲不吝於來儀、庶俯歆於微供、伏想、斗筭陋器、螻蟻餘生、雖彎石葦之弓、遂莫的鹿、徒下玄沙之鈎、曾巨得魚、忝挑傳燈之遠炎、以供曩祖之眞前、伏請、大願有レ力

眞慈無礙、曲垂提耳、俾獲安心、有明知見、而猛省回光、不假修證、而頓悟成佛、
然後、河爲帶山爲冠、祝北闕之寶祚無疆、雲如鶴雨如膏、資南畝之黎元有歲、謹疏

以下割書年月日等は諸疏と變りは無い。處で此の疏文は他のものと異なる點があるのみでなく頗る長く出來て居るが、元々瑩山清規所載の全文との事故矢張り太祖の御親作であらう。その異なる點と云ふのは一篇の後半は祖徳の讚仰と申すよりも寧ろ作者自身の懺悔を記した觀があることである。他の疏文でも作者自身の立場に觸れた言葉の存するものが全然無いではないが、此の篇の如く長々と申述べられたのは甚だ尠いのである。

2、教相の藥毒

さて本文に就て述べて見よう。慧日は智慧圓滿にして慈光を垂れて群類を救ふこと恰も日輪の萬物を化育するにも等しと云ふので釋尊のことを斯く云ふたのである。その釋尊も西天の靈鷲山中にお隠れなされてより既に一千年とならんとし、御法の雲は東方に移動して神丹即ち支

那に簇り起るに至つたが、印度と支那は陸上遠く十萬里を距つてゐて大法の弘通は實に國境を超越して居るぞよと。西と云つたから東と受け、一千年とあるから十萬里と云ふやうに對句の綯を存分に織りなされてある。普通に神州と云へば我が日本の事であるが今は神丹即ち支那を指したのである。

そこで佛法の始めて支那に渡來したのは後漢の明帝永平年間の事、その時佛像經論等を白馬に載せて献上したとの故事から、白馬云々と申されたのであるが、其後六朝から唐代にかけて高僧の輩出と共に頻りに經論の翻譯を行ふやうになつたが、これは多く天子の敕命に依つて従事したものである。赤鳥は日輪の事で今は天子を指し、吳會の祥を紹ぐとは帝位を繼承した事と見てよい。虬文は梵文の事で、經文の翻譯が盛んに行はれて虬文は漢字となつたから經教の流通するのも自然の勢ひである。従つて難解の哲理を解説した義釋、章疏等の末書が星の如くに繁く出來、教相、名目の謂はゆる黑豆勘定が雲の如くに流行して、遂には甲是乙非の論争となり、何れを正宗眞諦とすべきかに迷ふやうになつてしまつた。恰も刁の字を刀と誤り、魚の字がいつか魯となつた如く、縦に千年の星霜を閱し横に十萬の里數を距てた異郷の事である

から、殆んど取捨に苦しむ状態となつた。

3、正傳の佛法とその正脈

此の時に當つて我が藝祖即ち禪門の元祖たる魏の嵩山少林寺に住された菩提達磨大師は、教相の藥毒に酔つて居る眼前の佛學者流を始め、遠き將來の後裔をして活眼を開いて眞個の佛法を會得實踐させたき大慈悲の御心から、單傳の心法を齎らしてその教敕を返かに遠き僻陬にまでも蒙らせ玉ふたのであると。達磨大師は元々印度の人であるから、支那へ渡るには巨海萬里の波濤を越えなければならぬのであるが、これを物ともなさらずに、渡來先づ以て梁の武帝に謁見したのであるが、心要に就て問答を試みられたが、機根契はざるの結果、梁帝に見切りを附けて潜に魏の嵩山に走られたのである。この邊の消息を更に述べて、梁から魏へ行くには揚子江を渡らねばならぬのであるから一葦を重江に泛べと云ふ、葦は扁舟の事で本物の葦の葉ではない。少林寺に入つて面壁即ち坐禪修行を重ねること九年間とあるから九年を少室に終と云はれた。少室は嵩山に別にあつて少林寺とは違ふとの事であるが今は少林を指したのである。

然らば大師のお傳へなされた大法とは、教外別傳だと云はれるが、それは抑も誰がどう別傳したものと申せば、昔時釋尊靈山會上にはして御接化の折、御席に上られた儘金波羅華と云ふ美花を拈じさせられただけで、別に何とも金口をお開きなさらなかつた所、獨り飲光尊者即ち大迦葉さまだけが潜に破顔微笑せられたところ、此の時世尊は「我に正法眼藏涅槃妙心、實相無相の法門あり、摩訶迦葉に附屬す」と仰せられて半座を分つて之に迦葉を坐らせられたとある。この消息を拈華微笑の端的と申して、謂はゆる以心傳心——教外別傳の最初として、迦葉は之を阿難に阿難は之を商那和修にと嫡々相傳して遂に二十八代の達磨大師に至つたものであるから、飲光の正脈寄ありと云はれた。寄とは據り處即ち根據の事と見てよい。

4、二祖の斷臂得髓

達祖少林に在つて専ら坐禪修行なされて居た時、適々神光と呼ぶ一僧あつて、佛法の眞髓を傳へられんことを願ふた處、達祖は之を一言に却けて、「佛祖單傳の大法は小徳小智輕心慢心を以て得られるもので無い」と追ひ歸された。そこで神光はスゴスゴ退却するかと思ひの外、

大法欣求の心操止み難く、折しも降り來つた雪中に立つこと半夜、積雪膝を没するに至つても尙去らぬから、大師重ねて之を喝して道心の證據を見せよと仰せられた所、神光は携へ持つた一刀を出して左の腕を切つて之を差出したので、流石の達祖もその道心を認めて遂に大法を相續せしめ名を慧可と改めて神丹第二祖とせられたとある。この事を二祖斷臂と申して宗門に於ける求道美談の白眉となつて居るが、事實の有無は別問題として兎も角これを詩的に扱はれて庭中雪に立つ慧可の得髓疑ひなしと云はれたのである。されば法雷は廣く江北九州を震駭しその道風は四海の中に喧傳されるに至つたのであると。

こゝまでは偏に達祖の恩徳を讃歎したのであるが、以下は單に讃仰ではなくて、前にも申した如く作者御自身の願意と懺悔とも見るべき衷心の披瀝となるのである。

5、作者の願意

隻履西歸と云ふのは前にも述べた如く、達祖の入寂を指すのである。即ち御入寂の日に相當する今日、その末孫として攝齋北面即ち御供養申しあげ北面して讀經回向の勤めを忘れてなる

ものでない。であるから謹んで深重の御徳を瞻仰して現在尊前に献備する如きの誠禮を盡す次第である。何卒來儀應供を吝み給はず此の微供なりとも御敬け下さるやうに願ひたい。伏して想ふに我等末世の輩は斗筲の陋器で梘や箕で量る程に平々凡々の者共で而も螻蟻の虫けらに等しき存在であるから、彼の石輩の眞似をして強弓を引いて見ても鹿を射ることも出來ず、玄沙の如く鉤を垂れても魚を獲ることも成らぬ。と云ふ意は如何に古人の勝跡を慕ふて修行を重ねても、元々菲材であるから仲々以て大悟の域に達することも出來ぬと云ふ程であらう。されば徒らに遠い昔からの傳燈を墨守してこれを曩祖の眞前に供へ奉るに過ぎぬが、何卒後昆を覆蔭し玉ふ大願力を以て慈悲の眼を垂れさせられ、我等末輩を提携誘掖せられて安心立命の境地に導き給へ。我等末輩としても佛性の知見を開發し猛省一番、修證を超越する底の修行に努力して頓悟成佛の妙域に到らんことを念願する次第である。斯くて初めて及ばず乍らも國家の隆昌を祈り、今上の寶祚無疆を祝し奉つて一には臣民の赤誠を披瀝し、五風十雨の順候を禱つて南畝黎民の鼓腹擊壤を資助し、國家の一員たるの義務に背かざる様努力したのであると。河は帶となり山は冠となるとは國運の益々隆昌する様を形容されたものと思ふ。又雲は鶴の如く雨

は膏の如くとは雨調風順、黎元は農民、有歲は天壽の全きを指したのである。

六、高祖忌疏

淨法界身云乃至上酬慈恩之罔極者

伏惟

洞水逆流巨海波濤爲雷、黃龍電激普天雲雨爲潤、曹源之一滴點着而派流繁興、二株之嫩桂覆蔭而枝條鬱茂、五家家風無不通七宗宗要悉皆達、遍參和漢兩朝名匠、博覽內外顯密經教、百世之英傑千古之模範、吾扶桑之藝祖者乎、照第一天而有明於日月、眼目、觸破大千而轉妙於輪寶、法輪、仰冀、心眼相照正偏宛轉、君臣道合而旁參奉重、謹疏

七、太祖忌疏

淨法界身云乃至上酬慈恩之罔極者

伏惟

見色明心五百生前證果聖、聞聲悟道三千里外辨絃人、是非師剃度即介公嫡傳、原夢於覆木枝頭破草屨而垂洞谷開山統、表信於松樹林中舊衣鉢而董護國補助功、立二利行願、振一實宗風、元亨賜紫補總持於曹洞瑞世之道場、安永勅黃誼、太祖於弘德圓明之嘉號、更審、聖主優詔常山聳北仰天關深高宏遠、大師徽號濟水流南示門派汪洋氾濫、伏冀、白石生兒處直歆誠芹之芳馨、露柱懷胎時更通心香之氣息、謹疏

高祖太祖兩大師の疏は右の如くであるが、普通寺院としては兩祖忌を各別に修する場合は、殆んど無いと云へる程でもあり、殊に次に出る「兩祖忌疏」もある事だから、右の二篇は原文

を掲げただけで、例の講釋は遠慮して置く事にする。尤も兩祖の降誕會に際して表白文でも欲しい場合もあれば此の疏を少し焼き直せば其儘間に合ふ事もあると思ふから、心ある方は更に研鑽して見るもよからう。では兩祖忌疏の原文を掲げて其の大意を述べて見よう。

八、兩祖忌疏

淨法界身云乃至上酬慈恩之罔極者、右伏以、

跨_二船南海_一佛法東漸因緣、留_二錫北山_一祖師西來出處、將軍布金名勝擺撥如_二埃塵_一、皇帝賜紫官榮棄擲似_二洩唾_一、非_二於身心行_一儉讓_二要_一爲_二兒孫_一專惜_中福禧_上、撥_二轉靈機_一通身光明了々、繁_二興大用_一徧界瑞氣綿々、君臣道合國豐珊瑚撐_レ月、父子親密家富峯巒帶_レ雲、乃是瞬目破顏嫡傳莫_レ匪_二安心得髓正令_一、恩澤恢布一萬四千梵筵、眞風永扇五十六億涼燠、今迎_二大般涅槃之月_一、此展_二小伊蒲塞之筵_一、仰冀、蓮目垂_レ青芹意照_レ赤、謹疏

此の文は兩祖の恩徳を並べ讃へたものであることは云ふ迄も無いが、然し對句が必ずしも夫れ々々兩祖に懸ると云ふのではない。が然し見やうに依つて左様に取れない事もない。

先づ船に南海に跨る云云と云ふのは、高祖大師が入宋求法せられた勝躡_{（しやとく）}を指したので、佛法東漸の因縁を求むるため、交通不便な時代であつたにも拘はらず、筑前博多港から便船に依つて渡海入宋なされたのは誠に有り難いお思召であると。錫を北山に留む云云は大祖大師が遠く能登の山奥に止まられて永光、總持等の伽藍を建立せられたことを指すと見てよい。前句で佛法東漸と云ふたから之に對して祖師西來と申されたので、つまり達祖が西天から支那へ來られた事から、轉じて正法傳來と云ふ意味に用ひられる語である。さて又高祖は嘗て北條時頼公の請に應じて時の政廳たる鎌倉へ出向なされた時、公は大師の爲に建長寺を建立して開山に仰ぐ心であつたが、大師は固く之を辭退されたので止むなく蘭溪禪師をその開山に請せられたとある。布金の名勝とは謂はゆる土一升に金一升と云ふ程の事で、買ふべき土地全部へ金貨を布き詰めて此れを代價としたと云ふ祇園精舎の故事を引いたのである。大師は時の執權から布金の名勝たる鎌倉の精舎を寄進せられたにも拘はらず、之を塵埃の如くに擺撥し且つ玄明首座の持

ち歸つた千貫の寺祿も之を放擲して名利の外に超然たりし勝躅を讚歎して斯く述べられたのである。皇帝賜紫の官榮、即ち勅して紫衣を賜はつたときの高祖の後嵯峨上皇に對し奉つた態度と云ひ、又太祖の後醍醐天皇にお答へ申したお心持と云ひ、賜紫出世の榮達は元々眼中に無かつたのであつて、勅命の重きに鑑みてお請けは致されたものゝ之を高閣に束ねて御身に着かせられなんだとある其の事蹟を指したのであるが、兩祖の斯くの如き態度に出でられたのは、御自身に儉讓の美德を守られたのみでなく、末世の兒孫たる我々お互にまで其の福祉を遺し與へんのお思召からの御行狀である。世間の名利に對して右様の消極態度を取られたにも拘らず、兩師共大法興隆の爲には飽くまで積極的で、靈機を撥轉し大用を繁興して偏に一個半個の眞道人を打出するに努められ、又普く十方に接化して齊々たる傑物の培養に没頭せられたから、眞實人體の光明了々として沙界を照し、大法隆盛の瑞氣は綿々として遠近に徧ねくなつたのは必然の結果と申すべきであると。

されば君臣其の道に合ふて國家興隆し珊瑚枝上月團々と云ふが如き大平の狀影を呈し、父子親密にして家運頓に榮え、峯巒雲を帯びて悠々たる陽春の光景を來して居るが、彼の靈山會上

に於ける如來の拈華瞬目と迦葉の破顔微笑の以心傳心を其儘嫡傳し來つたもので、これぞ洵に安心の境致、得髓の正嫡と申さねばならぬ。然れば其の恩澤は大に布き施されて遂に一萬四千の末派となり、眞風は永遠の未來を盡くして絶ゆることなく扇ぐであらうと。五十六億とは彌勒佛が出現すると云ふ未來の年數で結局無數の年月と思へばよい。涼燠は寒暑と同様な意味でつまり一年の事である。以下は自分の願意を述べたに過ぎないので、小伊蒲寒は山蔬野茗と同様の意味で供養獻備の貧弱なるを指す。蓮目は佛眼のことで青は晴に通じてヒトミのこと、芹意は芹誠で赤は赤心と云ふ語の略である。即ち青に對して赤と云つた迄で別に色素や染料を取扱つたのではない。

九、各寺開山忌疏

淨法界身云乃至上酬慈蔭者 伏以

法眼圓明在世輝ニ日月眸ニ、徳宇活達觸處震ニ霹靂舌ニ、捏ニ轉帝釋鼻孔ニ建ニ立梵刹ニ、扶ニ出兩

祖肺腑ニ打ニ成群機、神人歸崇檀越子來、彷彿感レ月成レ紋靈犀角、依稀驚レ雷生レ華香象
 牙、已得ニ門風繁興、正是當寺鼻祖、遠孫何辨親奉惟勤、伏冀、無底鉢中齋供不受食外容
 納、謹疏。

一句と二句とは開山禪師御在世中の高德を讃歎したもので、法眼明眸を以て諸人の信望を
 擅にし富樓那尊者の辯舌を振つて至る處に感銘を興へた事を云ふ。昔、帝釋は一葦草を拈じ
 て梵刹即ち寺院を建立したとあるが、今、我が開山禪師は其の鼻をヘン折つて此に本物の伽藍
 を建立し、兩祖大師御親示の肺腑である正傳の佛法を敷演して來機の學人を接化せられた。さ
 れば神人共に之に歸依崇敬し檀徒は子の如く來り投じて其の薰陶に浴した。靈犀の角は月に感
 じて花紋を生じ香象の牙は雷に驚いて華形を成すとか聞き及んで居るが、我が開山禪師の高徳
 に靡いて信心の施主が招かざるに來集して教導薰化の實蹟を擧げられたることは洵にこれと彷彿
 たるものがある。故に門風盛んに扇いで遂に當寺の開祖となられたのであるが、さて末孫たる
 我等は何と御供養申し上げて其の厚恩に報ぜんものか、唯偏に芹誠を盡して奉侍するより外

はないのである。何卒無底鉢中の微齋を不受食外にお受け給はんことを願ふと。無底の鉢と云
 つても底抜け椀の事ではなく、功德無限の供養と云ふ程の意であり、不受食外とは受けて執着
 なき如來の應供に等しき那人の境地を形容したのである。

十、諸回向の大意

1、三佛會回向

淨法界身云云乃至上酬慈蔭 伏願

寂照圓明修證四種波羅密之妙徳、常住堅固獲得六義薄伽梵之最勝

寂照圓明とは如來常住の御姿を如實に指した言葉で、その如來の御姿そのまゝ常住不斷に波
 羅密とて到彼岸の妙行を修證し玉ひ、又六義の薄伽梵中最勝の地位を獲得し玉はんことを願ふ、
 と云つて如來の妙行を讃歎すると共に自分もその妙行に融けこんで如來と同修同證せんことを

願ふたのである。波羅密は譯して度とか到彼岸とか云ふ言葉で、煩惱の此の岸から涅槃の彼岸に到る修行の道程を云ふたのであるが、これに檀那（布施）、尸羅（持戒）、羼提（忍辱）、毗梨耶（精進）、禪那（禪定）、般若（智慧）の六方面があるから之を六波羅密と云ひ、その最後の般若波羅密を更に開いて方便波羅密、願波羅密、力波羅密、智慧波羅密の四とするを四種波羅密と云ふ。別説には常、淨、深、力の四種波羅密を指すのであるとも云ふ。
薄伽梵は譯して世尊と云ふとあるが、更に之に六義が含まれて居る。今はその六義全部を含む最勝の地位即ち如來世尊の覺位を獲得せんことを願ふと云ふ意で、つまり如來の妙徳を讃仰し之に薰習して自分も共に其の地位に進まんとの願意を表現したものである。

2、兩祖諷經回向

淨法界身云云乃至上酬慈蔭 伏願

不捨悲心愍三界六凡之衆、再來末世現一華五葉之春、覆蔭後昆祖風永扇

三界は欲、色、無色の三界と云ふてあるが、つまり凡夫のさまよふ有形無形の世界を指す。六凡の衆とは天上、人間、修羅、地獄、餓鬼、畜生即ち宇宙間に生存する一切の生物を指すのであるから、人間始め有らゆる生物と見ればよい。一華五葉の春とは蓮華の事とも云ふが、春風に咲き出づる雑多の美花と見ればよい。全文の大意は如來大悲の願力を捨て給はず、迷蒙の一切衆生を憐愍せられ、再び末世に出現遊ばされて、轉迷開悟、春風駘蕩たる心華を開發せしめ給ひ、後進の我等を覆蔭して、祖風の永く扇がんことをお祈りすると云ふ程の義である。各寺開山忌回向は右と全然同じで、唯祖風を門風としただけであるから茲に再記するには及ばない。

3、尊宿世代回向

寶明空海湛死生漩復之波、大寂空門融今古去來之相、仰冀真慈 俯垂照鑑

山門今月今日云云乃至增崇品位 伏願

曇華再現重開覺苑之春、惠日長明永照昏衢之夜

二祖三佛忌から各寺開山忌に至るまで、回向と云へば即ち淨法界身云云であつたが、この回向に至つて初めて劈頭から違つた文句が出て來た。然しその大意に於ては雪と墨ほど違ふのは無く、矢張宗乗の上から見た大寂空中の佛祖を讚歎したものである。寶明ほうみやうの空海は大悟底の境地であるが、其の悟海の上に生死の波が漂ふて居るといふので、つまり生死即涅槃、煩惱即菩提の實相を海と波とに譬えたものと見ればよい。大寂空門には去來もなく古今もなく、謂はば不増不減不去不來で、法身邊の消息は去來の相に預らざる様子を、相を融ゆうすと云ふたのである。死し生じやう渡たう渡たうとか今こん古こ去こ來らいとかは單に文字の絢まであるから深く拘かう泥でいすると却つて妙に解らなくなつてしまふ。

さて中間の散文は別に解釋するまでもなく分つて居るとして、伏願以後の對句に就て一言しよう。曇華は前にも有つた如く、曇曇華の事は何億年に一度と云ふ程滅多に咲かぬ花であるから、之を釋尊即ち現身佛の御出現に譬えたのである。現身佛の再現は五十六億七千八百萬年後に彌勒佛の出世があると云はれて居るが、それ迄は誰も成佛しないのかと云ふに、大乘の見地

から云へばそんな迂遠な話では無い。人々具足じんじんぐそく個々こご圓成まるところの佛性は修證不二で修行と悟道の限界は無いのであるから、お互は凡夫の儘で佛身そのものである。況んや尊宿なり世代なりと云ふ方々は、その儘曇華若しくは慧日たる佛身に相違ないから、強いて再現を待たずともよい筈であるが、そこは韻文いんぶんの絢まで、曇華即ち佛陀として此の世に再來し、寂光淨土の春風に慈眼視衆生の麗花を開き、慧日となつて妄想分別の闇夜を永遠に照らされんことを冀ふと、こんな意味に解してよいと思ふ。

尙二祖三佛忌開山忌回向には必ず「上酬慈蔭」(又は慈恩)とあるが、尊宿世代回向では「増崇品位」とある。當面の佛祖とは呼び得ない迄も尊宿なり世代なりは多く先輩と見るべきであるから、お互が相當の恩顧に預つて居るかも知れないが、然し御開山なら兎も角、ろくろく見知りもせぬ世代や最近迄同輩視して居た尊宿等に對して「慈恩」と云ふも物々し過ぎるから、寧ろ單に先輩又は先覺者として崇める方が無難であると云ふので増崇品位と云ふたのであらう。回向と云ふものも仲々よく考へたものと敬意を表する外はない。

4、亡僧回向

一靈心性 本無去來 幻化色身 有生有滅

仰冀三寶 伏垂照鑑。

山門今月今日云云乃至 莊嚴報地、伏願

眞空自悟早脫人間生死之根塵、心智圓明速入如來寶明之空海。

此の回向は初中後とも別に講釋する程の難かしい處は無いやうである。但し從來の回向は皆自分より上位に在る御方に對したものであるが、これは反對に下位に在る者に對してのものであるから、同じ願意にしても何がな教訓めいた點のあるのが特色である。

さて以上で本篇に掲載した諸回向の原文と大體の釋義とを終つたのである。豫て御斷りした如く淺學の爲め或は間違つた處も有るかも知れない事を危懼する點もあるが、然し自分としては相當調べた積りである。さればこれ以上の深い研鑽は各自の道心に俟つとして、今は單に初學の童蒙に資したに過ぎない事をお詫びして置く。

昭和十六年一月十日印刷 定價五十錢
昭和十六年一月廿日發行

著者 茂木無文

刊行兼印刷者 堀口義一

刊行所 代々木書院

東京市澁谷區代々木書院代々木町一五七〇

電話 東京七六〇一九番
電話 澁谷(一)一〇五六番

印刷所 文化商會印刷所

414
148

終

